

SABBATH SCHOOL BIBLE STUDY GUIDE

安息日学校聖書研究ガイド

聖書ドラマの 出演者たち



2001

2

安息日学校の目標

み言葉の学び

信仰の成長

温かい交わり

本気で伝道



上記の目標をもとに、各教会の必要に合う安息日学校の目標を立ててください。

編集長からのメッセージ

英国の宇宙物理学者ステファン・ホーキングはかつて、人類は1000億におよぶ星雲中の一恒星の軌道を回る一惑星上にある一点の化学的なちに過ぎない、と言いました。しかし、これは大きな誤りです。キリストは「化学的なちり」のために死なれたわけではありません。キリストはご自分にかたどって造られた人類のために死なれたのです。人類はキリストの尊い血によって贖われたのです（1ペト1:18、19）。

福音はまさしく神の業ですが、同時にそれは人類のための神の業です。人類のためでない福音はもはや福音とは言えません。福音について学ぶことは神の不変の愛、すなわち失敗と反逆に満ちた人類に対する神の不変の愛について学ぶことです。

クリフォード・ゴールドスタイン

（安息日学校聖書研究ガイド編集長）



序 言

聖書ドラマの出演者たち

創世記にある失樂園の物語から、黙示録にある樂園回復の約束に至るまでの救いのドラマに多くの人物が出演しました。彼らは聖人、罪人、奴隷、主権者、王、貧しい民、異教徒、預言者、平凡な一般市民でした。愛すべき人もあれば、嫌悪すべき人物もあり、尊い者、取るに足らない者、勇気に満ちた者、卑劣な者もいます。

聖書に出てくる名前は、無数の人々の中のわずか数百人にすぎません。ある者は非常に簡潔に、ある者はかなり詳しく扱われています。たとえば、ヨセフについての記録は21章に及びますが（創世30～50章）、ヨブの妻についてはわずか2節しか述べられていません（ヨブ2：9、10）。しかし、どちらも教訓に満ちています。

今期の研究に登場する聖書の人物は善悪双方の模範でありましょう。彼らは私たちと同じような状況・人間関係に置かれました。今期私たちはこれらの聖書の人物から次のことを学びたいと思います。

- (1) ここに登場する聖書の人物の生き方を復習する。
- (2) 彼らの成功と失敗の原因を分析する。
- (3) 大争闘における私たちの役割を考える。
- (4) 実践的な教訓を学ぶ。

「これらのことは前例として彼らに起こったのです。それが書き伝えられているのは、時の終わりに直面しているわたしたちに警告するためなのです」（1コリ10：11）。

名前こそ聖書に記されませんが、私たちはみな聖書に登場する人たちと同様に、このドラマの主役なのです。彼らの勝利と失敗の両方から教訓を学び取る必要があります。彼らの経験は私たちの経験でもあるからです。

ウィルマ・マクラティ

（米国サザン・アドベンチスト大学、英語学）

今期のテキストの翻訳は教団翻訳部、抄訳、適用、並びにミニガイドは曾根田健二先生が、校閲、校正は出版編集部、最終校閲を安息日学校協力牧師並びに教団安息日学校部が担当しました。

目次

聖書ドラマの出演者たち

序言	2
第1課	キリストとサタンの争い	4月7日 ... 4
第2課	裏切り者 ペトロとユダ	4月14日 ... 12
第3課	苦難の中の恵み ノアとヨブ	4月21日 ... 20
第4課	助言者としての妻	4月28日 ... 28
第5課	牢獄 <small>ろうごく</small> から宮殿へ ヨセフ	5月5日 ... 36
第6課	争う兄弟たち	5月12日 ... 44
第7課	子供から学ぶ	5月19日 ... 52
第8課	伝道と個人的な働き	5月26日 ... 60
第9課	力強い祈りの人	6月2日 ... 68
第10課	殉教者と殺人者	6月9日 ... 76
第11課	信仰の巨人たち	6月16日 ... 84
第12課	聖書の女性たち	6月23日 ... 92
第13課	小さな罪、大きな結果	6月30日 ... 100



第1課

3/31~4/7

キリストとサタンの争い

● 暗唱聖句 ●

「^{ことば}言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた」
(ヨハネ1:14、新共同訳)

「そして言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまことに満ちていた」
(ヨハネ1:14、口語訳)

安息日午後

今週のテーマ

3月31日

完全であった天界において地球の支配を巡り、二つの勢力が戦いました。キリストの権威に対するサタンのねたみが争いの始まりで、全人類がその中に巻き込まれました。この大争闘において聖書の人物がいかに神を選択したか、その記録を学びます。

対立する2つの勢力 罪は天において、ルシファーのうちに始まりました。美しく、光輝に満ち、天の宮廷において高い地位を占めていたにもかかわらず、ルシファーは与えられたもので満足しませんでした。彼は^{どんよく}貪欲にも、決して与えられるはずのないもの、つまりキリストご自身の権威を求めました。

「ああ、お前は天から落ちた / 明けの^{あけぼの}明星、曙の子よ。……かつて、お前は心に思った。 / 『わたしは天に上り / 王座を神の星よりも高く据え……いと高き者のようになろう』と」(イザ14:12~14)。

大争闘は舞台を地球に移し、人類を巻き込むことになりましたが、争点は同じで、支配はキリストかサタンかということです。

「わたしはお前を / 翼を広げて覆^{おお}うケルブとして造った。 / お前は神の聖なる山にいて / 火の石の間を歩いていた。 / お前が創造された日から / お前の歩みは無垢^{むく}であったが / ついに不正がお前の中に / 見いだされるようになった」(エゼ28:14、15)。

NOTE

聖書によれば、ルシファー(イザ14:12、英文)は完全な者として創造されました。その彼のうちに悪が見いだされるようになったというのです。聖天使であり、天国のような完全な環境にいた者が悪を行うことができたというのはどういうことなのでしょう。考えられるのは「完全」の中には不完全への可能性が含まれていたということです。聖書はルシファーが「完全」であったと述べていますが、悪への可能性がなかったという意味ではありません。それは完全な環境に生きていた完全な者のうちにさえ悪が見いだされるようになったという事実から明らかです。この場合の「完全」は、悪を行う可能性も含むものでした。

問1 神の完全な世界にどうして罪が起こるのでしょうか。

それはだれにもわかりません。罪について説明することは罪を合理化することにつながります。一つだけはっきりしていることは、神が愛の神であり(ヨハ4:8、16)、愛が愛であるためには“強制がない”ということです。たとえ神であっても、愛を強制することをなさいません。強制された愛は愛でなくなるからです。楽器のトライアングルが「トライアングル」(三角形)であるためには3つの辺を持つ必要があるように、愛がその定義の通りに愛であるためには、自由でなければなりません。愛が天国の基礎であるなら、愛さない可能性、従わない可能性もまた認められるべきです。このようにして、神はルシファーを自由な存在として創造し、ルシファーもまたその自由を用いて誤った選択をしたのでした。

自由は今日の私にとって何を意味しますか。

NOTE

キリストとサタンはかつて目的において一つでしたが、ルシファアの反逆により永遠に離ればなれになりました。キリストは永遠の道、真理、命のままでしたが(ヨハ14:6)、サタンは「偽り者の父」となりました(ヨハ8:44)。サタンについての聖書の最も古い記録を見ても、彼が偽り者であることがわかります。「蛇は女に言った。『決して死ぬことはない』」(創世3:4)。これらの言葉は、もし禁じられた木の実を食べるなら『必ず死んでしまう』(創世2:17)とアダムに警告された主の言葉に真っ向から逆らうものでした。つまり、真理と偽りの対立は聖書の初めにおいてすでにはっきりしていたのです。

偽り者の父であるサタンはその誤った業を彼に従う者たちに伝え、預言者たちさえ欺こうとしました。「わたしは、わが名によって偽りを預言する預言者たちが、『わたしは夢を見た、夢を見た』と言うのを聞いた」(エレ23:25)。

神は偽りをきわめて重大視されます。それゆえ、姦淫や殺人と同様に、十戒の中で偽りを禁じておられるのです(出エ20:16)。神は私たちのすることだけでなく、言うことをも重要視されます。

問1 現代の社会で“嘘”“偽り”が問題になっている例がありますか。キリスト教以前の社会においても、非キリスト教社会においても常識的に“嘘が悪”とされているのをどう考えますか。

問2 次の聖句は真理について何と書いていますか。

詩編 117 : 2 _____

箴言 16 : 6 _____

「真理はあなたたちを自由にする」(ヨハ8:32)とのイエスの言葉にはどんな意味があるのでしょうか。自由と規律を考えてみましょう。福音と律法にも関連がありませんか。

イエス誕生のとき、マリアは与えられる男児について、「イエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである（マタ1:21）」と言われました。四福音書はイエスを罪からの救い主とし、敵対者サタンとの闘いという観点から描いています。対照的に、サタンはイエスの敵、人類の告発者（黙示12:7～13）として描かれています。

「告発者」サタンの典型的な姿は、ゼカリヤ書3章に見られます。「主は、主の御使いの前に立つ大祭司ヨシュアと、その右に立って彼を訴えようとしているサタンをわたしに示された（3:1）。この聖句の中で「訴える」と訳されている動詞は「サタン(Satan)」と同じく、3つの子音からなる語根(stn)から来ています。したがって、「サタン」という名前そのものが「告発者」「敵対者」を意味するわけです（『教会への勧告』下巻第19章参照）。“各時代の^大争闘”は「キリストとサタンの間」の^大争闘であって、「キリストと私」、あるいは「サタンと私」の間の^大争闘ではありません。

問1 「あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、だれかを食い尽くそうと探し回っています」（ペト5:8）というサタンについての描写から私たちは何を学びますか。

サタンの存在を信じない人々でも、世には善と悪の戦いがあると考えの人がいます。キリストが生まれる500年も前、ギリシアの哲学者エンペドクレスは、この世界には「友情と不和」という二つの勢力が闘っていると記しています。アメリカの法律学者、オリバー・ウェンデル・ホームズは言いました。「私たちはみな大いなる戦いに参加している兵士であるが、その詳細は隠されている」（『アンカー・ポイント』59ページ）。多くの人は事の「詳細」については知らないものの、善と悪の戦いが存在することは感じています。

善悪の闘いが現実のものであることを信じている私たちは、どんな意識をもって毎日の生活を送るべきですか。

NOTE

伝記作家は、単調で変化の少ない「一面的な人物」よりも、多様で変化に富んだ「多面的な人物」について書きたがるものです。その意味ではキリストもサタンも多面的な存在で、聖書記者がどちらにもさまざまな名称を用いて描写しています。

問1 次の聖句を読んで対照的な表現を書いてください。

キリスト	サタン
ヨハ 10 : 11 羊飼い	ヨハ 10 : 12 狼
マタ 13 : 37	マタ 13 : 39
テモ 2 : 5	黙示 12 : 10

名前の意味するもの **比喩**とは、ある事柄をわかりやすく説明するために似ている他の事柄を借りて表現することですが、どんな比喩も何かを完全に説明するには不十分です。ペトロはイエスを小羊(ペト 1:19)にたとえ、ヨハネは同じイエスを獅子(黙 5:5)と言いました。

イエスについての多様な名称 命のパン、大祭司、第二のアダム、神の子、人の子、救い主、千歳の岩、われらの義なる主、インマヌエル(神は我々と共におられる)、輝く明けの明星、弁護者、油を注がれた者、救いの創始者、アルファでありオメガである者、過ぎ越し、天地創造の時から屠られた小羊、真実な証人、良い羊飼い、道、神の言葉、真理、創造主、驚くべき指導者、かなめ石、あがない主、復活、命、ぶどうの木、救いの君、私たちの義、王、小羊、獅子……。

これらの称号はキリストとキリストの御業についてどんなことを教えていますか。あなたはどの呼び方に最も親しみを感じますか。神に対する考え方も多様ですが、多様な名前、呼び方は自分の個性に合った方法で神を受け入れる助けになりませんか。画一した型で人々に霊的な問題を押し付けるのは賢明でないと思いませんか。

時代の終わりに「カーテンコール」があります。出演者全員が舞台に出て『惑星地球』というドラマのクライマックスに立ちます。出演者はそれぞれ、この世の偽りの神(マタ4:8、9)と「王の王、主の主」(黙示19:16)のいずれかの側につくことになります。

問1 キリストとサタンの最終運命を比較してみましょう。

黙示 19 : 7 _____

黙示 20 : 9、10 _____

「サタンは『この世の神』(コリ4:4)と呼ばれています。なぜならこの世とその住民を完全に支配することが彼の目的だからです。サタンは『この世の神』です。なぜなら世界の大部分は彼の支配下であり、人々の心を支配しているからです(エフェ1:1、2比較)。この世は彼の命令に従い、彼の誘惑に屈し、悪に荷担しています。サタンはすべての罪の創始者、扇動者、化身そのものです。故意に罪を犯す者は彼に引き渡されたと言われています(コリ5:5、テモ1:20比較)。サタンは『この世の神』です。限定的であるにせよ、彼は自然界の力、つまり陸・海・空の力を支配しているからです」(『SDA 聖書注解』6巻854ページ)。

無条件降伏 聖書は、世の終わりに、サタン、罪、悪が永遠に滅ぼされるということを明確に述べています。善と悪の大争闘には妥協、中立、譲歩、停戦というものはありません。あるのはただキリストの完全かつ全面的な勝利と、その敵サタンの完全な敗北だけです。同様に、キリストに従う者たちは完全に勝利し、サタンに従う者たちは完全に敗北します。

私たちは世にあって妥協を求められる場合がありますが、キリストとサタンとの大争闘の結末では、悪に対する譲歩の余地はありません。このことは、悪に妥協することについて何を教えていますか。

NOTE

サタンは愛のうちに与えられた自由を悪用することによって墮落しました。その結果、大争闘が起こったのでした。私たちは最終的に二つの選択肢の一つを選ばなければなりません。キリストにある永遠の命か、サタンとの滅びかです。聖霊の助けにより、正しい選択ができるように祈りましょう。

大争闘の発端となったのは高慢であり、最高位に就きたいとの権力に対する欲求でした。ルシファーは権力に対する誘惑に屈しました。ルシファーと同じく、ピラトも自分の誤りに気づいていましたが、感覚を麻痺させる権力への誘惑にあえて逆らいませんでした。「ピラトは、キリストのよみがえりを聞いたときにふるえた。彼は、なされた証言を疑うことができなかった。そして、その時から、彼は心の平安を永久に失った。彼は、世の榮譽のため、彼の権威と生命とを失うことを恐れたため、イエスを死に渡したのであった。彼は、ただ単に、罪のない人ではなくて、神のみ子の血を流した罪を、はっきりと認めるに至った。ピラトの生涯は、その最後まで、実に悲惨なものであった。彼の心は絶望と苦悶にさいなまれて、希望も喜びもなくなってしまった。彼は、だれからも慰められることを拒んで、最も悲惨な死にかたをした」(『初代文集』314ページ)。

もっと深く学びたい方へ

140以上に及ぶイエスの称号・名称については、ハロルド・モンサー編『モンサーズ・トピカル・インデックス・アンド・ダイジェスト・オブ・ザ・バイブル』(英文)330～332ページにあります。

大争闘の始まりについては『人類のあけぼの』上巻第1章「罪悪はなぜ発生したか」をお読みください。大争闘の終結については『各時代の争闘』下巻第42章をご覧ください。

ミニガイド

【罪惡の起源】

「どうして罪が起こったのか、なぜ罪があるのか」は「多くの人々の心を苦しめる問題」とエレン・ホワイトは書いています。彼女は「人間の説明できない神秘」「罪の存在を理由づけようとして罪の起源を説明することは不可能」「罪は侵入者であって、その存在については理由をあげることができない。それは神秘的であり、不可解」と述べています（『各時代の争闘』下巻227ページ以下）。

今週の研究は罪の発生をめぐるキリストとサタンの大争闘という人類救済史前についての内容で、類推する聖句は多くありません。聖書、預言の霊の枠を越えた想像や断定には気をつけましょう。

【聖書の根拠】

罪が天使の世界に生じたことについては神学者たち(ストロング、ホッジ、ベルコフ、シーセンなど)も、たとえば ペトロ2:4の「罪を犯した天使たち」、ユダ6の「自分の領分を守らないで、その住まいを見捨ててしまった天使たち」という表現を挙げています。また墮落の理由として、監督に関する注意の中で「高慢になって悪魔と同じ裁きを」（テモ3:6）とのパウロの言葉を引用し、「権威、力において神のごとくなりたいとの“高慢”の罪」（ルイス・ベルコフ、改革派）であった可能性を論じています。

イザヤ14章、エゼキエル28章にあるルシファーについては、初期の教父ヒエロニムスやテルトリアヌスらは「サタン」と解釈し、以来、これが中世キリスト教に受け継がれました（『SDA 聖書注解』イザ14:12の項）。SDAの大争闘的視点やサタンについての教えは決してSDA教会の独断でないことを知ってください。

ヘンリー・シーセンは、「今日、現代主義的教師達の間には、サタンの人格性を取り除いてしまおうとする強い傾向が見られる。彼らは以前には「悪魔」と呼ばれていたものを、単なる「悪」として語りたいのである。しかし聖書は、実に豊富にサタンの人格性を証ししている」として、聖書からその人称代名詞、人格的属性を挙げ、サタンを抽象的存在にしないよう警告しています（『組織神学』参照）。

聖書は人の罪と救いの物語を主題としており、聖書は私たちの救いのために必要な事柄を啓示しています。サタンの本質や実在を勉強することが研究の要点ではありません。聖書の中心テーマに沿って、また自身への教訓をガイドから学びましょう。



第2課

4/7~4/14

裏切り者 ペトロとユダ

● 暗唱聖句 ●

「主は振り向いてペトロを見つめられた。ペトロは、『今日、^{にわとり}鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう』と言われた主の言葉を思い出した」
(ルカ 22 : 61、新共同訳)

「主は振りむいてペテロを見つめられた。そのときペテロは、『きょう、鶏が鳴く前に、三度わたしを知らないと言うであろう』と言われた主の言葉を思い出した」
(ルカ 22 : 61、口語訳)

安息日午後

今週のテーマ

4月7日

イエスの弟子の中でペトロとユダという2人のよい点はどちらも積極性、能力のある弟子であったこと、2人に共通した悲劇は数時間の間にいずれも主を裏切り、否定したことでした。

ペトロよ、お前もか！ ユダよ、お前もか！ ペトロとユダはキリストの能力ある弟子でした。聖書に登場する人物の多くがあまり目立たない存在であるなかで、2人は特によく知られている人物です。聖書を神の言葉としてでなく、偉大な文学として読む人たちがさえ、ペトロとユダの裏切りは知っています。

どんな人も家族、国家、教会、友だちに対する愛、忠誠、信頼を重んじます。友を裏切る話は好ましいものではありません。親友であり、養子にもしたブルータスの手で暗殺されたときのユリウス・カエサルの苦悩に満ちた「ブルータス、わが子よ、お前もか！」との嘆きは、2000年後の私たちにも深い印象を残しています。2人の親しい友から裏切られたときの神の子イエスの苦しみはそれ以上のものでした。

問1 主が12使徒を選ばれたルカ6:12～16の記録を読み、次の文章について考えてください。

NOTE

ユダはイエスに感応した。「ユダはキリストのご品性の美しさを感じなかった。そしてしばしば救い主のことばを聞いているとき、彼に改心の気持ちがあらわれた」(『患難から栄光へ』下巻261ページ)。

ユダは変わりたいと願った。「彼は、生まれ変わった者になりたいと心から願い、またイエスとのつながりを通して、そうした経験をもちたいと望んでいた。しかしこの願いは、彼の心の全部を占領するまでには至らなかった」(『教育』95ページ)。

ユダは多くの才能に恵まれていた。「彼のうちには、教会にとって祝福となることができたかもしれないとうい品性の特徴がいくつかあった」(『各時代の希望』上巻381ページ)。

ペトロもまた多くの才能に恵まれていた。「ペトロは……迅速、熱心、勇敢、決然としていた。キリストは彼のうちに教会にとってすばらしい素質をごらんになった」(『教会へのあかし』4巻488ページ)。

ペトロは謙遜なキリストの姿を見たくなかった。「ペテロは、神のみ子と信じている主が、しもべの役割を果たしておられるのを見るにしのびなかった。彼は全心全霊でこの屈辱感と戦った。……『もしわたしがあなたの足を洗わないなら、あなたはわたしとなんの係わりもなくなる』とのイエスの言葉を聞いて、ペテロは、自分の高慢とわがままに打ち勝った(ヨハネ13:8)。彼はキリストとなんの係わりもなくなるという思いに耐えられなかった。それは彼にとって死であった」(『各時代の希望』下巻121、122ページ)。

2人とも優れた素質を持っていましたが、キリストに対するその応答の仕方が2人の人生を全く異なったものとなりました。2人とも罪人であり、赦しを必要とし、共に主を裏切りましたが、一方は永遠の命の約束にあずかり、もう一方は永遠の滅びに落ちました。これら2人の人物の生き方や考え方の相違を理解することは非常に重要です。

NOTE

ペトロもユダも知っていながら罪を犯しました。ユダは最終的に、「わたしは罪のない人の血を売り渡し、罪を犯しました」(マタ27:4)と告白しています。ペトロは「外に出て、激しく泣いた」(ルカ22:62)と後悔の念に圧倒されています。

聖書はユダを否定的に描いています。彼の悔い改めは明らかに偽りのものでした(マタ27:3)。彼は故意に、計画的に、邪悪な者たちと共謀して公然とイエスを裏切りました(マコ14:45、ヨハ18:2、3)。その意味で、ユダの裏切りはペトロの否認と全く異なっていました。

問1 ユダは祭司長に「イエスを渡せば幾らくれますか」と持ちかけ、銀貨30枚で取引しました(マタ26:14~16)。ペトロは「たとえ、御一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません」(26:35)と主に約束しました。2人はそれぞれイエスにどんな気持ちを持っていたと思いますか。どんな動機が2人の運命を変えたと思いますか。

ペトロは決してキリストを否定するつもりではありませんでした。彼の行為は無意識的に、恐怖心から出たものでした。それとは対照的に、ユダの行為は前もって計画されたものでした。どちらも過ちを犯し、品性の欠陥を現し、確かに主を裏切りましたが、一方の行いは計画的で、一方の行いは一時的な弱さから出たものでした。

ユダと同様に、ペトロもいくぶん否定的な性質の持ち主でした。ペトロは呪い(マタ26:74)、暴力を働き(ヨハ18:10)、臆病に振る舞っています(ルカ22:57)。彼は非常に自信家で、キリストに対する忠誠を疑いませんでした。しかし、最初の大きな試みに遭ったとき、みじめな敗北を味わいました。

ユダのように、公然と、計画的に神に対して罪を犯した人は絶望的でしょうか。それでもまだ希望があると思いますか。ユダと同じように、公然と、計画的に罪を犯し、なお神から赦しを受けた人を聖書から挙げることができますか。

同じ日に、ひとりの弟子は約束を破り、もうひとりには銀貨をもって、最良の師イエスを裏切りました。彼らの行為は唐突ではありませんでした。裏切りに至るまでのそれなりの過程があったのです。

ユダ ユダはある時点で、キリストが世俗的な利益よりも霊的祝福を約束しておられることに気づきました。ユダは世俗的な名誉と繁栄を求めていましたが、イエスが地上の名誉や繁栄を最終的に求めておられないことを悟り、イエスに従っていても名誉も繁栄も得られないことがわかったのです。この時を境に、ユダはイエスから離れていきました。

キリストはユダを救うために長く忍耐されました。しかし、ユダは最後の晩餐の席で最終的な憐れみの嘆願を拒絶しました。それとなく非難されたことに怒り、また野望を裏切られたことに失望したユダは、イエスに従うことを拒否し、ついには忍び寄る貪欲どんよくな悪魔に自分の魂を売り渡したのです。

ペトロ ユダと同様、ペトロの失敗も突如として臨んだわけではなく、徐々に訪れました。ペトロは何ものも自分をキリストから引き離すことはできないと自負していました。「主よ、御一緒になら、牢に入っても死んでもよいと覚悟しております」(ルカ22:33)。このうわべだけの大胆な告白は、ペトロが自分の信仰とキリストへの献身に関して、いかに自己欺瞞に陥っていたかを示しています。

多くの点で自信はクリスチャンにとって最も危険な罪の一つです。なぜなら、私たちの信仰は、自分が全く無力で、自分の力では自らを救うことができないという考えに基づいているからです。ペトロは明らかにまだこの原則を理解していませんでした。彼は徐々に自信過剰に陥り、ついには主をあからさまに拒絶するに至ったのです。

救いは自身にでなくキリストのうちにあります。ユダとペトロの経験は、サタンを心に侵入させてはならないことを教えています。罪に固執することの危険性がわかるでしょうか。

NOTE

ユダはキリストを裏切った後、首をつって死にました(マタ27:5)。対照的にペトロはキリストを否定した後、信頼に足る使徒、初代教会の力強い指導者となりました(ペト1:1)。2人とも外面的には自分の行為を悔いています。何が違っていたのでしょうか。

罪の結果を恐れたユダの悔い改め ユダはキリストを裏切った後で、祭司長たちのところに行き、次のように言っています。「わたしは罪のない人の血を売り渡し、罪を犯しました(マタ27:4)。しかし彼の悔い改めは聖書に基づいた真の悔い改めでもなければ、自分の行為そのものについての心からの悲しみではなく、自分の行為の結果に対する恐れとか後悔から出たものでした。ユダの罪悪意識は自分の行為そのものではなく、したことの結果として刈り取らなければならない罰への恐れにとどまりました。彼の魂のうちには、主を裏切った罪に対する深い、心を打ち砕く悲しみはなかったようです。

ペトロの誠実な悔い改め ペトロはキリストが最大の必要と苦しみの中にあるときに主を拒みました。しかし彼はのちに悔い改め、再改心しました。彼は行為の結果だけでなく、行為そのものを心から悔いました。このような悔い改めを通して、聖霊は人の心に働き、彼を造り変えてくださいます。ペトロは全く自分の罪に打ち砕かれ、真心から悔い改めたので、主は彼を真の悔い改めと改心に導くことができになりました。「神の求めるいけにえは打ち砕かれた霊。/打ち砕かれ悔いる心を/神よ、あなたは侮られませんが」(詩編51:19)。

問1 聖書の人物の中から、大きな罪を犯して悔い改めた人、大きな罪を犯して悔い改めなかった人を挙げてください。

アントニオは自分と家族に多くの苦しみをもたらすような重大な罪を犯しました。彼は神を愛し、自分の行為を悔いています。自分の悔い改めが本物が、単に罪の結果を恐れているのか、罪そのものを悲しんでいるのか確信がありません。どのように助けることができるでしょうか。

問1 「しかし、見よ、わたしを裏切る者が、わたしと一緒に手を食卓に置いている」(ルカ22:21)との聖句は、イエスがユダのすることをご存知でありながら弟子のグループにしておかれたことを示しています。主の配慮から何を学びますか。ユダが心を変えて主を売らないようになる可能性はあったと思いますか。

NOTE

多少の難しい問題を含んではいますが、聖書は人間の自由意志についてはっきりと教えています。クリスチャンとしての、またアドベンチストとしての私たちの信仰は、自由意志なくしてはほとんど意味をなしません。主はユダがご自身を裏切ることを知っておられましたが、ユダがそうするように予定されたではありません。そうでなければ、ユダがキリストを裏切ったために罰せられる意味がなくなります。ユダは明らかに自由意志を与えられていました。また、聖書には、主がすべての人の救いを望んでおられると教えられています(ペト3:9)。ユダにも救われる機会がありました。イエスがユダをずっとそばに置いておかれたのは、彼に裏切りの機会を与えるためではなく、むしろ救われる機会を十分に与えるためでした。

ユダと同様に、キリストはペトロも救われるように望んでおられました。「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた。しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい(ルカ22:31、32)。これらの言葉からもわかるように、イエスはペトロがいつの日か改心し、教会のための有力な人物になることを知っておられました。ユダの場合と同様に、キリストの予知は、キリストがペトロを偉大な使徒となるように予定しておられたことを意味するものではありません。むしろ、キリストはその予知によって、ペトロとユダが自らの自由意志を用いて何をするかを知っておられたということです。彼らはそれぞれの方法で、キリストの提供されたことに応答する機会を与えられていました。彼らがどのような選択をしたかは、それぞれの伝記を見れば明らかです。

NOTE

ペトロとユダはキリストへの裏切りという点でいつまでも人々の記憶に残ります。2人とも品性において好ましい部分と弱さを持っていました。その差は、ひとりはいエスの力に任せ、ひとはそうしなかったのです。一方は純粋な、もう一方は間違っていた悔い改めでした。

▼ もっと深く学びたい方へ ▲

「イエスから^{けんせき}譴責されて、彼〔ユダ〕の精神はにがい恨みに変わったようであった。傷つけられた誇りと、復讐心とが壁を打ち倒し、長い間ほしいままにしていた貪欲が彼を支配した。このことはまた罪をいつまでももてあそんでいる人間の経験となる」（『各時代の希望』下巻 221 ページ）

「われわれも、苦難におそわれるとき、ペテロのようになることがどんなに多いことだろう。われわれは、目を救い主にそそがないで、波を見つめる。われわれの足はすべり、もりあがった波がわれわれの魂の上を越える。イエスは、ペテロが減びるために、みもとに來いと命じられたのではなかった。イエスは、ご自分に従うようにわれわれを召しておいて、そのあとでわれわれを捨てるようなことをなさらない。イエスはこう言われる、『恐れるな、わたしはあなたをあがなった。わたしはあなたの名を呼んだ、あなたはわたしのものだ』（『各時代の希望』中巻 124 ページ）

キリストに従う者はみな、ペトロやユダと同じ立場に置かれています。私たちはキリストの救いにどのように応答するかに関して選択の機会を与えられています。各自はこれらの機会をどのように用いているか自らに問いかけてみる必要があります。なぜなら、最後には、ペトロの運命かユダの運命か、二つの運命のどちらかを選ぶ時が来るからです。毎日の決断は私たちがどちらの道に導いているのでしょうか。

ミニガイド

先週は罪の起源について、今週はユダの問題、予定でなく予知などという聖書の勉強の中でも微妙な部分に触れ、さらに私たちに正しい意思の選択を勧めています。

16世紀のカルヴァンは神の絶対的主権の立場から救いと滅びの二重の聖定という予定説を唱え、オランダのアルミニウスは予知説を強調して人間の側の責任を訴えました。前者は改革派神学の中核となり、後者はメソジスト運動に大きく影響しました。

人は道徳的な自由意志を持っているか、ということも神学上の大きな議論です。4世紀のペラギウスは人に善悪双方への選択の自由があると主張し、アウグスティヌスは墮落した人間は罪しか選べず、意思の自由なしとして対立しました(後の教会会議はペラギウスを異端としました)。罪に墮ちた私たちは善と悪を自由に選ぶ力も意志も失いました。聖霊は世界に充ちていて罪の抑止力となり、人に善を選ぶように働いています。私たちは聖霊の感化と力に頼るのみです。

疑おうと思えば疑う余地は幾らでもあります。しかし聖書全体の思想から見れば、「神はユダが裏切るように予定し、計画し、運命づけた」とは到底理解できません。ユダの裏切りは彼の自発の行為であり、彼の責任でした。エレン・ホワイトは『各時代の希望』(76章)の中の1章を割いてユダの悲劇を述べています。

「彼は、この大教師を愛し、いっしょにいたいと望んだ。彼は、品性と生活を変えたいという願いを感じ、イエスと関係することによってこのような経験をもちたいと望んだ。救い主はユダを拒否されなかった」(下巻216ページ)

ユダはイエスを裏切った直接の下手人でしたが、裏切りはユダに限りません。罪深いのは私たちも同じです。幸いなことに、キリストはユダにさえも主の食卓に席を用意してくださっておられたのです。この用意があるので、私も救われるのです。

予定か予知か、意思の有無は?などの議論は今も続いており、いずれかの側に立って議論すれば深い矛盾と疑問に直面するでしょう。どのような立場や前提をもって学ぶかによっては、祝福にも混乱にもなります。聖書を勉強する場合、私たちはバランスの取れた注意深い考えと姿勢、信仰的な把握が大切です。安息日学校は神学教室ではありませんから、私たちの信仰への励まし、教訓という点を学び取りましょう。



苦難の中の恵み

ノアとヨブ

● 暗唱聖句 ●

「ヨブは主に答えて言った。『あなたは全能でありノ御旨の成就を妨げることはできないと悟りました』」 (ヨブ記42:1、2、新共同訳)

「そこでヨブは主に答えて言った、『わたしは知ります、あなたはすべての事をなすことができ、またいかなるおぼしめしでも、あなたにできないことはないことを』」 (ヨブ記42:1、2、口語訳)

安息日午後

今週のテーマ

4月14日

試練がいかに長く、厳しくても、神にある信仰は私たちに「苦難の中の恵み」といわれる経験を与えてくれます。「苦難の中の恵み」がどうしたことなのかをノアもヨブも理解していました。今週は2人の信仰体験から「苦難の中の恵み」を学びましょう。

現代的教訓を持った古代の物語「ノア」といえば「箱舟」、「ヨブ」といえば「試練」を連想します。これらの出来事しか聖書は彼らの生涯に関して記していません。ノアは950年生きました。神に召されて120年もの間、未経験の雨、嵐、洪水による滅亡を世に警告しましたが、多くの人は彼の使命を信ぜず、その働きは水泡に帰したかに見えました。ヨブについても家族、財産の損失、恐ろしい皮膚病、失望させるような妻の言葉、親しい友からの執拗な批判に悩みました。

古い昔の出来事ですが、ノアとヨブの経験、その苦しみと悩みは現代の私たちに重要な真理を教えています。状況こそ違っていますが、私たちは今も同じ世の罪の問題と格闘しているからです。悩みの日に信仰、希望、恵みはどのようにその力を発揮するのでしょうか。

ノアとヨブの伝記を理解するためには、まずその背景を理解する必要があります。物語が書かれた時の歴史的状況、時代、場所、人物を調べてみましょう。

NOTE

問1 創世記6:5、6を読み、ノアの時代の社会的状況を調べてください。ヨブが試練を受けるに至った背景を見てください。ヨブ1:6～12

これらの聖書物語を理解する上で重要なのは、地上のドラマの多くが天にその真の背景を持っているということです。創世記には何度か、天におられる神が地上の物事を見て決断しておられると記されています。ヨブ記には神とサタンとの闘いが天で始まり、それが地上で進行する様子が描かれています。地上の出来事は天の出来事にその起源があるということです。ですから、天の背景を理解することによって地上の出来事を正しく理解することができます。私たちが自分の目で見、経験する事柄は、しばしば目に見えない、宇宙的な出来事が背景にあるというわけです。ですから、天で発生した背景を学ぶことは地上における出来事を説明してくれることとなります。

聖書注解者の多くは、モーセが創世記を書く前にヨブ記を書いたと信じています。ヨブ記は、愛にして全能の神によって造られた世界にどのように悪が発生したのかという問題に対してある説明を与えています。ヨブ記が最初の書であることを考えれば、ある程度理解がつかめます。多くの人々にとって、罪悪の問題は神の存在と同様、第一級の、最も難しい問題と言えます。ヨブ記はこの疑問に答えてくれます（もちろんわからない点もたくさんありますが）。

キリストとサタンとの宇宙規模の戦いについて知ることは、私が直面している問題乗り越える上でどんな助けになりますか。目に見えない実在である悪魔が世にあって働いていることを知るのには、自分たちが受ける試練を正しく理解する助けになりますか。

NOTE

主は人類に120年の恵みの期間をお与えになりました(創世6:3)。やがて「恩恵期間」が閉じられ、世界は洪水によって滅ぼされることになっていました。「箱舟に入って救われよ」との当時の“現代の真理”のメッセージを受け入れた者だけが救われました。

ノアが120年のうち何年を箱舟のために費やしたかは、聖書に明示されていません。箱舟の巨大さから考え、ノアのように人生を100年単位で生きた人たちにとってさえ、その期間は相当なものだったはずです。箱舟建造の期間、彼の信仰は厳しく試されました。なぜなら彼はまだ起こったことのない出来事に関して、懐疑的で墮落した世界に警告したからです。「信仰によって、ノアはまだ見ていない事柄について神のお告げを受けたとき、恐れかしくみながら、自分の家族を救うために箱舟を造り、その信仰によって世界を罪に定め、また信仰に基づく義を受け継ぐ者となりました」(ヘブ11:7)。

「ノアの時代、古い世界の住民は義の説教者の言葉を迷信的な恐れや前兆であるとして冷笑しました。ノアは空想家、狂信者、人騒がせな人として非難されました。『ノアの時代にあったようなことが、人の子が現れるときにも起こるだろう』。人々は、ノアの時代と同様に、現代における厳粛な警告の言葉を拒絶するでしょう」(『教会へのあかし』4巻308ページ)。

- 問1** ノアの信仰は“120年”という期間以外にも試されました。
- イ) 雨が降るまで箱舟の中で何日待ったでしょうか。創世7:10
 - ロ) 洪水はどれくらいの間続いたでしょうか。創世7:17
 - ハ) 水がなくなるまでどれほどかかったでしょうか。創世8:3

これらの期間は、ノアが箱舟のために働いた年月と比べるとずっと短いものですが、その間ノアの信仰が激しく試されたことは想像に難しくありません(ノアが箱舟にとどまって雨の降るのを待っていた7日間は、どれほど長く感じたことでしょうか)。

苦難はいろいろな形でやってきます。経済、感情、身体的な問題、家族や社会、霊的な苦難など、挙げれば数限りなくあります。

NOTE

ヨブ1:14、15 牛、ろばなどの家畜略奪……資産喪失

ヨブ1:18、19 子供たちの不慮の死……家族の不幸

ヨブ9:33 神とヨブの間の仲裁、調停者不在……精神的不安

ヨブ10:18 なぜ自分は生まれてきたのか……生きることへの絶望

ヨブ19:14 親族、友人に捨てられる……孤独、孤立

問1 「厳しい試練はあなたの品性を強めない。ただあなたがどんな人間かを明らかにする」という言葉があります。これについて、あなたはどのように考えますか。

いかに誇張された特殊体験であっても、差こそあれ、ヨブの経験はすべての墮落した人類に共通して襲う苦しみです。どんな人にも、ヨブのように充実した時期があり、ヨブのように絶望する時期があります。すべての人が彼と似た経験をします。そして信仰の人、神を愛し、キリストによるすばらしい救いの約束を信じる人たちでさえ、ヨブのように、試練をお許しになる神の摂理に疑いを抱くことがあります。ヨブ記が教えているのは、疑いもまた信仰の一部であるということではないでしょうか。

敬虔なクリスチャンであるカーラは、火事で夫とひとり息子を失いました。彼女は悲しみのあまり、あるときは神の存在が信じられないと悩み、神は導いておられると心に言い聞かせるときもあります。そのような感情や心の思いは決して異常ではありません。そのようなとき、ヨブの経験はどんな助けを与えてくれますか。

NOTE

ノアはその忍耐強い信仰のゆえに「義の使者」(ペト2:5、英語改定標準訳)と呼ばれました。ヨブはその忍耐強い信仰のゆえに、「わたしは知っている/わたしを贖^{あがな}う方は生きておられ」(ヨブ19:25)と言いました。

ノアが「義の使者」と呼ばれたのは、彼がキリストの義、すなわち私たちを救うことのできる唯一の義である神ご自身の義を説いたからです。「ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です」(ロマ3:21、22 10:3~6、3:17参照)。贖い主の存在を信じるヨブの言葉(ヨブ19:25)は、彼が救いを理解していたこと、また救いが人によってでなく神によって得られることを示しています。「この聖句は、人の贖い主としての神に関する旧約聖書の啓示の一つであって、イエス・キリストの人格と使命において余すところなく人間に啓示された深遠な真理です」(『SDA 聖書注解』3巻549ページ)。

問1 苦難のとき「救いの希望はキリストにのみある。自分のうちにはない」ということを理解するのはなぜ大事なのでしょうか。

神と共に歩んでいる人は、キリストに近づけば近づくほど、自分自身が罪深い者に見えてきます。自分の罪深い状態とキリストの救いの恵みを経験している人は、「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっています」(ロマ3:23)という聖書の真理を理解することができます。罪深い状態を知ることは私たちに大きな失望をもたらし、試練の中にある人には、自分自身の罪が試練をもたらしたと考える傾向があります。であれば、困難な時期にあっては自分の義にでなく、ただキリストと信仰によって与えられるキリストの義にのみ望みを置くことはいかに大切なことでしょう。

すべての伝記が必ずしも「めでたし、めでたし」というハッピーエンドで終わるとは限りません。また、「めでたし」という表現がそれらの伝記の結末に本当にふさわしいかどうかにも大いに疑問ですが、ノアとヨブが長く苦しい試練ののちに勝利の経験にあずかったことは事実です。

問1 ヨブが受けた試練と、ヨブについての次の言葉(ヨブ記42章)を比較してください。

7 節「わたしの僕ヨブ」

11 節「兄弟姉妹、かつての知人たちが彼のもとを訪れ……」

12 節「主はヨブを以前にも増して祝福された」

13 節「ヨブは7人の息子と3人の娘をもうけ……」

17 節「ヨブは長寿を保ち……」

「神はノアと彼の息子たちを祝福して言われた。『産めよ、増えよ、地に満ちよ……』(創世9:1~3)。ノアは洪水のあと、数々の祝福を耳にし、契約の虹を仰ぎ、神の守りの保証を確認しました。しかしながら、ノアは別の意味で勝利に預かりました。彼が長年警告し続けた洪水はその言葉の通りにやってきました。彼の信仰は長年のあざけり、中傷、さらにはたぶん自分自身の疑い(彼も人間でした)にも勝利し、決定的な祝福を持つことができました。彼は、目に見えるところによってではなく、信仰によって生き、行動することがどんなことかを悟りました。

「忍耐した人たちは幸せだと、わたしたちは思います。あなたがたは、ヨブの忍耐について聞き、主が最後にどのようにして下さったかを知っています。主は慈しみ深く、憐れみに満ちた方だからです」(ヤコ5:11)。

ノアもヨブも長生きして「幸いな」結末を迎えましたが、試練に生きるすべての人が同じ経験をするわけではありません。最終勝利はいつ実現しますか。現世で最終的な希望を期待してはいけませんか。

NOTE

ノアとヨブは長くて苛酷な、様々な苦難の中を生き残りました。彼らのもっとも苦しい試練は“人々の誤解”という点ではないでしょうか。自分を支えてくれるはずの人たちから悪意と中傷を浴びせられました。このようなもっともつらいプレッシャーを受けながら、彼らの信仰は神の恵みにしっかりすがり続けたのでした。

ディスカッション

(1) 愛の神、力の神の存在についての議論では、必ず“悪の発生”という避けられない疑問が生じます。ある著者がこう書きました。「もし神が完全に愛であるなら、この世の悪を滅ぼそうとするだろう。もし神がすべての力を持つなら、悪をなくそうとするに違いない。ところが世に悪が実在する。だから神は全能でも愛でもありえない」(『哲学：文学からの序論』クライマン&ルイス・パラゴン社発行、1992年、457ページ)。

クリスチャンとして、特にキリストとサタンの間の大争闘を知る者としてこのような考えにどう答えたらいいでしょうか。この世において完全な解答があると思いますか。

(2) “偉大な信仰の章”といわれるヘブライ11章を読んでみましょう。神の約束についての言葉が多くありますが、これらの約束がこの地上での成就でなく、新しい世界での解決であるように見えます。

「この人たちは皆、信仰を抱いて死にました。約束されたものを手に入れませんでした。はるかにそれを見て喜びの声をあげ、自分たちが地上ではよそ者であり、仮住まいの者であることを公に言い表したのです。……ところが実際は、彼らは更に勝った故郷、すなわち天の故郷を熱望していたのです。だから、神は彼らの神と呼ばれることを恥となさしません。神は、彼らのために都を準備されていたからです」(ヘブ11:13~16)。

厳しい試練についての勉強で、このような約束は重大でしょうか。こうした約束にすぎない信仰を育てる生き方が必要でしょうか。

ミニガイド

「創世記」は物事の始まりについての素朴な物語であり、歴史や科学の資料として勉強するものではありません。事実の是非を論じたり、合理的な解説は無理というものです。神とサタンとの対等な会話、地球規模の洪水、降って沸いたような苦しみの是非など、限りある人間には理解し尽くすことはできないでしょう。ただし、聖書のこれらの物語は各時代に生きた聖徒たちに「すべてを支配したもう神がおられる」との力強い信仰の励ましとなってきました。Satan rules, God over-rules(サタンが支配するが、神はその上を支配する)という言葉があります。地上に激しい嵐があっても、飛行機が厚い雲を抜けて上昇すれば、そこにはいつも変わらぬ青空があり、太陽が輝いています。神はこの世のさざめきを超えて私たちを見守ってくださっています。ヨブ、ノアの物語はこうした霊的な教訓に満ちています。

【箱舟に乗っていた期間】

- ・ノアは雨の始まる7日前に箱舟に入った(7:4、10)
- ・降雨はノアが600歳の年の2月17日から始まった(7:11)
- ・40日間雨が降った(7:12)
- ・水は150日の間地上にみなぎっていた(7:24、8:3)
- ・箱舟は7月17日にとまった(8:4)
- ・10月1日に山々の頂が見えた(8:5)
- ・ノアは601歳の1月1日に箱舟の覆いを取った(8:13)
- ・2月27日に箱舟から出た(8:14～19)
- ・箱舟には1年と17日おり、5か月漂流し、7か月間山上にあった
(ハーレー『聖書ハンドブック』参照)

【ヨブの信仰の結果】

「すべては、ヨブの信仰通りになった。『彼がわたしを試みられるとき、わたしは金のように出て来るであろう』(ヨブ23:10)と彼は言った。そしてその通りになった。彼は、根強い忍耐をもって自分の品性を擁護し、そしてまた自分の代表している神のご品性を擁護した」(『教育』177ページ)。



第4課

4/21~4/28

助言者としての妻

● 暗唱聖句 ●

「この時のためにこそ、あなたは王妃の位にまで達したのではないか」
(エステル記4:14、新共同訳)

「あなたがこの国に迎えられたのは、このような時のためでなかったとだれが知りましょう」
(エステル記4:14、口語訳)

安息日午後

今週のメッセージ

4月21日

聖書は夫と妻との関係をキリストと教会の関係で描写し、夫婦を美しく、また愛の理想として表しています。聖書の中では男性、または夫が圧倒的に主要な記述を占め、女性や妻は比較的補足的な存在として出てきますが、聖書全体には夫へのよき助言者としての妻の物語も記録されています。今週はこの教訓を学びます。

私的な助言者としての妻たち 聖書の伝記はおもに男性しか扱っていません。若者、老人、善人、悪人、王、預言者など、ほとんどが男性の話です。これにはいろいろな理由があるでしょう。聖書の書かれた時代は明らかに男性中心の時代だったからです。事実、聖書に女性の名前がつけられている書巻は2つしかありません。しかし、女性はこのドラマ『惑星地球』の中できわめて重要な役割を果たしており、終わりの日まで女性たちの役割は続きます。

今週は、良い意味でも悪い意味でも、平凡な家庭の女性が夫たちに対して、霊的、政治的、道徳的な助言者の役割を果たしたことを学びます。彼女たちの与えた助言、その効力、夫たちの反応を調べ、彼らの経験から教訓を学びたいと思います。

伝記作者はその人の生涯の大きな出来事を中心に書き、分析しますが、ときにはささいな出会いや経験も重視します。小さな経験や言葉、ちょっとしたエピソードが彼らの伝記に価値を与えるのです。ペルシャ王クセルクセス王とイスラエルの王ダビデは、機知に富み、思慮深く、勇気ある女性、エステル(エス8:4~6)とアビガイル(サム上25章)から強い助言を受けました。エステルは、王に助言を与えることで王妃としての立場を危うくしました。これと反対に、アビガイルはダビデに対する助言を通して彼の妻となります。

愚かな男、賢い女 エステル記8章、サムエル記上25章に出てくる男性、ハマン、ナバルは、知恵によってではなく、むしろ貪欲、ねたみ、怒りによって行動していることがわかります。これに対し、ここに出てくる女性、エステル、アビガイルの2人は、大きな危険を犯してまで、男たちによって引き起こされたかもしれない恐ろしい状況を変えるために懸命な努力をしています。

問1 サムエル記上25章を読んで、アビガイル物語を確認してください。愚かな夫のために彼女は機知、配慮を用い、身の危機を覚悟で動きました。過ちのない彼女が「私が悪うございました」と言って罰を受けようとしたことをどう思いますか。

エステルも機知と思慮をもって、欲望と怒りに支配された男のたくらみと災いを食い止めるために努力しました。エステルの場合はアビガイルよりも事は重大です。彼女の言葉、決断、行動、思いのすべてに民全体の命運がかかっていたからです。ハマンは自分の高慢と尊大さのゆえにユダヤ民族全体を滅ぼそうとしていました。アビガイルと同様に、エステルも自ら大きな危険を冒して夫に助言を与えようとしていました。彼女は死を覚悟で、王の前に立ちました。王は彼女の願いを聞き入れ、ハマンの不正なたくらみは阻止されました。

NOTE

もしハマンが妻の言葉に聞き従っていたなら、彼はたぶん時期尚早の、不名誉な死を免れることができたでしょう。「彼は一部始終を妻ゼレシュと親しい友達とに話した。そのうちの知恵ある者もゼレシュも彼に言った。『モルデカイはユダヤ人の血筋の者で、その前で落ち目になりだしたら、あなたにはもう勝ち目はなく、あなたはその前でただ落ちぶれるだけです』」（エス6：13）。

問1 妻ゼレシュの“状況判断”を夫ハマンはなぜ尊重しなかったと思いますか。妻の“見方”に従っていたら、悲劇は防げたと思いますか。“妻のアドバイス”について何か学ぶことがあるでしょうか。

イエスの処刑で苦境に立たされていた総督ピラトは愛する妻クラウディアから“夢のお告げ”を聞きました。「あの正しい人（イエス）に関係しないでください。その人のことで、わたしは昨夜、夢で随分苦しめられました」（マタ27：19）。もしピラトがこの妻からのアドバイスに従っていたら、多くの悲しみは避けられたでしょう。エレン・ホワイトは、ピラトの妻が見た夢について次のように描写しています。「キリストの祈りに答えて、ピラトの妻のもとに天からみ使いがおとずれ、夢の中で、彼女は救い主を見、共に語ったのであった。ピラトの妻はユダヤ人ではなかったが、夢の中でイエスを見たとき、イエスの性格や使命に疑いをもたなかった。彼女はイエスが神の君であることを知った。彼女は、イエスが法廷で裁かれるのを見た。彼女はその手が犯罪人の手のように固くしぼられるのを見た。……さらに彼女の目はもう一つの光景を見た。彼女はキリストが大いなる白い雲に乗り、一方地は空間に揺れ動き、キリストを殺した者たちがその栄光の前から逃げ出すのを見た」（『各時代の希望』下巻242、243ページ）。

妻を通して与えられる助言には主からのものもありました。どんな意味で、私たちもハマンやピラトのように良い助言を拒む危険性があるでしょうか。これら不幸な男たちと同じ失敗に陥らないためには、どんな注意が必要ですか。

親しい夫婦の関係は必ずしも良い助言の保証とはなりません。最初の墮落は明らかにエバの罪によるものでしたが、それはまたアダムの罪でもありました。同じように、アブラムがハガルを妻としたとき、アブラムもサライも共に罪を犯したのです。このことからわかるように、人に罪を犯させる者は、自らも罪を犯すことになります。

罪は束になって襲って来ます。罪が一つだけで来ることはあまりありません。罪の魔力はたいていの場合、単独でなく、他の罪と一緒に、互いに補強し合いながら襲って来ることがあります。エバの墮落がこの原則の良い例です。彼女の最初の過ちは、夫のそばから離れたことでした。彼女は禁じられた木の近くにいつまでもいました。次に、その木から食べてはならないという神の言葉を疑い、蛇の声に耳を傾けます。こうしてエバは、明らかな神の命令に反して、自分自身の判断と視覚に頼り、その木から食べて食べます。「そして、彼女は、その実を彼女の夫に差し出して、彼を誘惑したのである」(『初代文集』258ページ)。

問1 墮罪のあと、アダムは、「あなたがわたしと共にいるようにしてくださった女が、木から取って与えたので、食べました」と神に弁解し、エバも、「蛇がだましたので、食べてしまいました」と答えています(創世3:12、13)。どうして私たちは罪の責任を他人に押し付けようとするのでしょうか。

族長アブラム、美人だが不妊であった妻サライ、彼女の女奴隷エジプト人のハガル 世界最初の三角関係です。信仰の人アブラム、よさそうに見えたシナリオ、東洋的背景、女同士の協力から反目へ 見事な予想は悲劇に終わりました。提案者は妻であり、誤った助言でした。「サライはアブラムに言った。『主はわたしに子供を授けてくださいません。どうぞ、わたしの女奴隷のところに入ってください。わたしは彼女によって、子供を与えられるかもしれません』」(創世16:2)。

妻の助言で夫を罪に巻き込む同じ危険が今日も存在します。

NOTE

ヨブの妻については聖書の中にわずか2節だけ言及されているに過ぎません。しかし、苦しみのあまり思わず口にしてしまった言葉とはいえ、夫への彼女の助言は聖書を読む世界の人に知られています。「どこまでも無垢むくでいるのですか。神を呪って、死ぬ方がましでしょう」(ヨブ2:9)。この不幸な女は悲嘆のろの中にありました。財産を失い、子供はみな死に、「東の国一番の富豪」(ヨブ1:3)と言われた夫は病にかかり、瓦礫がれきの中で哀れな姿で泣いています。彼女の行動は正しくなかったかもしれませんが、気持ちには十分に理解できます。

問1 苦難に直面したヨブと妻はどんな対照的な反応を示したでしょうか。ヨブ2:9、10

ヨブは神に信頼していましたが、妻は、少なくともその時は、そうではありませんでした。ヨブが妻の「助言」をはっきりと拒んだのはそのためです。ヨブの妻に関しては、その苦痛に満ちた叫び以外には何も記されていませんが、ヨブについては、絶えず主を礼拝する正しい人として聖書に描かれています(ヨブ1:1~5)。彼の神との関係、また忠誠心が、この危機にあって彼を支えたことは明らかです。

ヨブの妻の言葉は苦痛の中で思わず出たものですが、ヘロデの妻の助言は計算された、冷酷な、全くの悪意から出たものでした。初めのうちはヘロデも「バプテスマのヨハネを殺すように」というヘロディアの残忍なたくらみを拒んでいました。ヘロデは、「ヨハネは正しい聖なる人であることを知って」いたからです(マコ6:20)。ところが、退廃的な宴会のさなかに(マコ6:17~29)、彼は妻の言葉に負け、良心に反してヨハネの首をはねます。

ヘロデの行為は、良心や理性の抑制があるとはいえ、感情や感覚がいかに強力なものであるかを教えています。聖書が体と感情を抑制するように繰り返し教えているのも不思議ではありません。あなたのうちには、ヘロデの犯した恐ろしい過ちに陥る傾向はありませんか。どうしたら同じ過ちを避けることができますか。

聖書は細かく描写しないにせよ、人間の欠点を隠さずありのままに書いています。信仰の勇者であろうと、その欠点を取り繕うことなく記録しています。欲望、虚栄、高慢という誘惑の中にあつて、原則に堅く立った人たちの模範が与えられていることは、すばらしいことです。

エステル記1章にある王の酒宴を読んでください。

背景 クセルクセス王は王宮において、7日間にわたり、盛大で豪華な宴会を催します。

争点 王妃ワシュティは、酔った観衆の前でその美しさを披露するように命じられますが、それを拒みます。このことが国家的な問題へと発展しました。「この王妃の事件が知れ渡りますと、女たちは皆、『王妃ワシュティは王に召されても、お出ましにならなかった』と申して、夫を軽蔑の目で見るようになります」(エス1:17)。

結果 身の危険を顧みずに原則に立ったワシュティは、王妃の地位を失います。

問1 ワシュティについて聖書は多く書いていませんが、男性支配の文化的背景の中で、自身の慎み、原則を守り、専制君主の命令を拒みました。彼女は何を考え、何を守ったのでしょうか。エス1:10～12

創世記39章にあるヨセフと彼の主人の妻の話を読んでください。

背景 「主人は、ヨセフに目をかけて身近に仕えさせ、家の管理をゆだね、財産をすべて彼の手に任せた」(3、4節)。

争点 「ヨセフは顔も美しく、体つきも優れていた」(6節)ので、ポティファルの妻はこの魅力的な若者を罪に誘いました。ところが「ヨセフは耳を貸さず、彼女の傍らに寝ることも、共にいることもしなかった」(10節)。

結果 ポティファルの妻のうそのため、ヨセフは投獄されます。

原則を守る人は時に辛い立場に立たされることがあります。

NOTE

家庭の中での自分のちょっとした言葉、示唆、意見、コメントが重大な決定となる場合があります。今期のガイドに出てきたそれぞれが善と悪の双方に大きな感化を与えました。しかも世界を左右する影響力です。彼らの記録は聖書を学ぶ幾百万の人々に絶えず教訓を与え続けます。

次に挙げる例は互いに協力して何かをした夫婦です。これら夫婦の間にどんな会話があったのでしょうか。

【悪いことのために協力した夫婦】

* アハブとイゼベル (列王上 16 : 31、18 : 4、17、19 : 1、2)

イスラエルの王アハブは偶像教徒の王女イゼベルと結婚し、預言者エリヤを迫害しました。アハブをそそのかし、動かしたのは妻イゼベルで、彼女の発言が王の行政、判断に影響を与え、預言者の命を狙う方向に導きました。

* アナニアとサフィラ (使徒 5 : 1 ~ 5、7 ~ 10)

初代教会の有力な信徒で献身的な夫婦であったアナニアとサフィラは教会への献金を話し合い、相談して土地を売却しました。ところがアナニアは「妻も承知の上で」代金をごまかし、一部を自分たちのために残して、「あなたは神を欺いた」とのペトロの恐ろしい宣告を聞くことになりました。

【良いことのために協力した夫婦】

* アキラとプリスキラ (使徒 18 : 2、3、18、24 ~ 26、ロマ 16 : 3、4)

天幕造りをしながらどのように牧師、伝道者を助け、伝道活動を支援するかが夫婦の会話でした。パウロは彼らの家を基地にして小アジアに福音を伝えました。2人は伝道者アポロを助け、伝道旅行に参加し、パウロをして「命がけで私の命を守ってくれたこの人たち」「異邦人のすべての教会が感謝している」と言わせました。

* ヨセフとマリア (ルカ 1 : 26 ~ 56、マタ 1 : 18 ~ 25、ルカ 2 : 7)

マリアは天使からの驚くべき宣言を信じ、ヨセフもまた天使の指示に従ってマリアを受け入れる素直な信仰に結ばれた夫婦でした。この2人から世の救い主イエスが生まれました。

ミニガイド

【聖書におけるエステル記の場所】

バビロンと違ってペルシャは支配民族に寛容で、政治的な自治と宗教自由を認めました。クセルクセス王(ペルシャ読みでアハシュエロス)の時代、国家的には最盛期で、彼は外国人を高官に登用し、またハーレムと饗宴(きょうえん)に日々を過ごしたことが歴史に残っています。この時代にユダヤの若い女性エステルが王妃に迎えられ、民のために重大な役目を果たしました。

エステル記は道徳を教える物語というより、むしろ民族救済という歴史的な事実の記録です。彼女の機知と勇気によってユダヤ民族絶滅が回避されました。もしハマンの提案が取り上げられればユダヤ民族は地上から抹殺され、そうなればメシア誕生はありえず、神の救いの計画に大きな変異が生じたことでしょう。エステルは知ってか知らずか、世の救い主への道を備えたのでした(ハーレー『聖書ハンドブック』)。エステル記の宗教的教えの要約(SDA 聖書注解、『エステル記』参照)

- (1) 全10章に神の名は一度も出てきませんが、神の摂理と生ける神への信仰の励ましを見ることができます。
- (2) エステル記はユダヤの大事な祝祭であるプリムの祭りの起源を教えるもので、ユダヤ人は今日でも春のこの日にエステル記を読んで民族救済の日を盛大にお祝いしています。
- (3) 神は誇る者を低くし、神に頼る者を高められます。
- (4) 神の力に人間の努力がつながり、民族救済が実現しました。方法は人間的でしたが、救いは神のものでした。

ルターの子、カタリーナ 宗教改革者マルチン・ルターは、「自分は日々、異端者の死を覚悟しているので結婚しないし、できない」と友人に語っていましたが、1523年、修道女であったカタリーナ・ボラと結婚しました。彼女は賢く、信仰深い女性でした。

ある日、ルターが疲れて帰宅すると、喪服姿のボラ夫人が出迎え、「いったい誰のお葬式？」と尋ねる夫に答えました。「神様です」「そんなわけではない。神様が死ぬなんて」でも近頃のあなたを見ていると、まるで神様がお亡くなりになったみたい。失望して力を失っているルターを機知をもって支え、励まし、助ける彼女はそんな妻でした。ルターは彼女の言葉に勇気を取り戻して、大事な働きを続けました。



第5課

4/28~5/5

牢獄ろうごくから宮殿へ

ヨセフ

● 暗唱聖句 ●

「わたしは、どうしてそのように大きな悪を働いて、神に罪を犯すことが
できましょう」 (創世記 39 : 9、新共同訳)

「どうしてわたしはこの大きな悪をおこなって、神に罪を犯すことができ
ましょう」 (創世記 39 : 9、口語訳)

安息日午後

今週のテーマ

4月28日

聖書の中でもっとも詳しい伝記の一つはヨセフ物語です。その誕生から死までは、伝記作家にとってまことに複雑多岐な材料を備えた人物と言えます。どんな小説家もこのような物語を創作することができないほど、ヨセフの生涯は人生のあらゆる場面を描写しています。まさに「事実は小説よりも奇なり」です。

- (1) ヨセフの誕生をめぐる緊張
- (2) 兄たちのねたみと弟殺害の計画
- (3) 仕組まれた偽装工作
- (4) 苦難に満ちたエジプトへの旅
- (5) ポティファル家の管理とその妻による誘惑
- (6) 不運な投獄
- (7) 夢の解き明かしと昇進
- (8) 兄弟たちへの抑えがたい思い
- (9) 袋の中の銀と消えた杯
- (10) 兄弟たちの品性改変を試すヨセフ
- (11) ヨセフが身分を明かした感動
- (12) 奇跡的な父と子の再会

2人の姉妹がひとりの夫に嫁ぎ、夫は一方の妻の方だけを深く愛す 幸せな家庭にあるまじき構図です。しかも、愛されていない妻レアには6人の子があり、もう一方の愛妻ラケルに子がひとりもないのですから、溝は深まるばかりです。「わたしにもぜひ子供を与えてください。与えてくださらなければ、わたしは死にます」(創世30:1)。ラケルは悲しみのあまり叫びます。

問1 この求めにどんな皮肉な解答が与えられたでしょうか。
創世35:16~20

複雑な家庭に生まれ、弟ベニヤミンの誕生と引き換えに生母を失ったヨセフが次に聖書に登場するのは、兄たちと共に羊を飼う17歳の少年の時です。ヨセフと兄弟たちとの関係はよい状況にあります(創世37:2参照)。

父ヤコブがヨセフを特別にかわいがり、晴れ着を作ってやったことで緊張が高まります。「兄たちは、父がどの兄弟よりもヨセフをかわいがるのを見て、ヨセフを憎み、穏やかに話すこともできなかった」(創世37:4)。ヨセフが自分の見た夢について兄弟たちに語ると、関係はさらに悪化しました。

問2 夢のどんな部分が兄弟たちを怒らせましたか。創世37:5~8

ヨセフはまた夢を見ます。これまで大目に見ていた父も彼を叱って言いました。「今度は兄たちだけでなく、父にも話した。父はヨセフを叱って言った。『一体どういうことだ、お前が見たその夢は。わたしもお母さんも兄さんたちも、お前の前に行って、地面にひれ伏すというのか』」(創世37:10)。

ヨセフの少年期の物語は、幸せな家庭生活の大切さについて教えています。両親が愛と思いやりをもって、この年齢にある子供たちの情緒的な安定のためにどのような努力をすることが大切でしょうか。

NOTE

父ヤコブもヨセフ当人も、兄たちの憎しみの強さに気づいていませんでした。もし気づいていたら、ヤコブは決してヨセフを兄たちのところに行かせなかったでしょう(創世37:14)。兄たちの憎しみは、「ヨセフを殺してしまおうとたくら」むほどでした(18節)。兄弟を殺害しようとするほどヤコブ家は崩壊状態でした。幸運にも、兄弟のひとり、ヨセフを穴に投げ込むという代案を出します(あとで助ける考えでした)。おかげでヨセフは死を免れましたが、奴隷として売られることになりました。

問1 ヨセフを殺さないことにした兄弟たちの理由は何でしたか。創世37:27

伝記作者は人生を大きく変えた出来事について書きたがります。有名人にインタビューするときなど、その人の人生に重大な影響を与えた事件を知ろうとします。しかし、ヨセフのように、愛された息子から奴隷に転落するという劇的な経験をした人はまれです。そのような悲惨な境遇にあっても、聖書は、「主がヨセフと共におられた」と記しています(創世39:2)。

問2 「主が共におられた」との聖句と奴隷に売られたこととの間に矛盾はありませんか。神の臨在と人生の不幸とをどう考えたらいいのでしょうか。

ヨセフのような経験をした人は自分の運命を恨み、その苦しみを(神を含めて)誰かのせいにしがちです。しかし次の一文を読んでください。「この一日の経験が、ヨセフの生涯の分岐点になった。その恐ろしい不幸が、あまやかされた少年から、思慮深く、勇敢で沈着なおとなに彼を変えたのである」(『人類のあけぼの』上巻235ページ)。

人生の悲劇は時に人を高潔にし、奈落の底にも落とします。どのように、また何をもって対面するかがあなたの岐路になるでしょう。

紀元前5世紀、ギリシアの悲劇作家ソフォクレスは戯曲『アンティゴネー』を書きましたが、女主人公アンティゴネーは、反乱を起こして処刑された兄の埋葬を禁じるクレオン王の命令に背いて葬りを行い、死刑に処せられます。このとき彼女は、「兄を葬ることを罪とするのは神々のみ」と言いました。この言葉は、人間の布告や要求を超えた崇高な個人の信念についての最初の記録とされています。『アンティゴネー』が書かれる千年も前に、ヨセフは主人の妻の誘惑を拒むことで神に基づく自己の信念を守り通したのです。

問1 ヨセフの、彼女への返事はどのような原理に基づく信念だったのでしょうか。創世39:9

もしヨセフが主人の妻の誘惑に屈していたら、彼は自分自身に対して、主人に対して、また主人の妻に対して罪を犯したことになります。さらに「神に」罪を犯すことになりました。数百年後、ダビデは人の妻を奪い、その夫を殺すという姦淫と殺人の罪を犯したあと、神に祈りました。「あなたに、あなたのみわたしは罪を犯し/御目に悪事と見られることをしました」(詩編51:6)。ヨセフもダビデも、罪の恐ろしい性質を認識し、祈りと告白が天に届くことを理解しました。

問2 「人に対して罪を犯すことは神への罪となる」ことを考えてみましょう。ヨセフは主人の妻、ダビデはバト・シェバに罪を犯すことが神への罪と認識していました。

ヨセフはまたしても何の過失もないのに、苦境に陥ります。しかも今度は牢獄に閉じ込められ、足には「足枷」、首には「鉄の枷」がはめられることになります(詩編105:18)。絶望し、自分の運命を呪ったとしても不思議ではありません。

ヨセフは正義のためにあえて大きな犠牲を伴う立場に身を置きました。あなたも同じ経験をしたことがありますか。

NOTE

牢獄においてさえ、ヨセフは才能を発揮しました。「監守長は監獄にいる囚人を皆、ヨセフの手にゆだね、獄中の人のはずべてヨセフが取りしきるようになった。監守長は、ヨセフの手にゆだねたことには、一切目を配らなくてもよかった。主がヨセフと共におられ、ヨセフがすることを主がうまく計らわれたからである」(創世39:22、23)。「ヨセフが陰気な牢獄の各場面で果たした役割は、彼をついには繁栄と名誉の位にまで引き上げました。高い地位に就く準備として、ヨセフに誘惑、逆境、苦難による経験を積ませることが神の計画でした(『霊の賜物』3巻146ページ)。

問1 忘恩の中に神の摂理はどう働きましたか。夢を解き明かしてくれたヨセフの頼みを忘れた給仕役は、ファラオの夢のことで幸運にもヨセフを思い出し、これが出世の糸口となりました(創世40、41章)。

夢と夢の解き明かしのゆえに兄弟たちの怒りを買って、投獄されたヨセフでしたが、皮肉なことに、夢と夢の解き明かしのゆえに今度は王の目にとまり、牢から出されることとなります。

7年の豊作と7年の飢饉きんに関するヨセフの解き明かしには、次の勧告が伴っていました。「このような次第ですから、ファラオは今すぐ、聡明で知恵のある人物をお見つけになって、エジプトの国を治めさせ……これから訪れる豊年の間に食糧をできるかぎり集めさせ……るのです」(創世41:33~35)。この任務のために選ばれたのがヨセフでした。このようにして、卑しい囚人であったヨセフはエジプト中で最高の権力と名誉と影響力を持った人物のひとりとなりました。人生の逆境においてもふてくされず、恨まず、屈折せず、ヨセフが忠実な精神を変わることなく実践したことが祝福をもたらしたのです。

ヨセフは逆境と苦難のときにも誠実に生きました。しかし、富と権力と名誉の地位についたとき、彼は新たな試練と誘惑に直面したことでしょう。エジプトの宰相としてのヨセフの新たな地位はどんな大きな危険をもたらしたと思いますか。

「また、世界各地の人々も、穀物を買いにエジプトのヨセフのもとにやって来るようになった。世界各地の飢饉も激しくなったからである」(創世41:57)。ヨセフの兄弟たちもやって来ました。彼らがヨセフを奴隷として売ったのはもう何年も前のことでしたが、牢獄に入れられた兄弟たちがまず考えたことは試練の原因でした。「彼らは……互いに言った。『ああ、我々は弟のことで罰を受けているのだ。弟が我々に助けを求めたとき、あれほどの苦しみを見ながら、耳を貸そうとしなかった。それで、この苦しみが我々にふりかかった。』すると、ルベンが答えた。『あのときわたしは、「あの子に悪いことをするな」と言ったではないか。お前たちは耳を貸そうとしなかった。だから、あの子の血の報いを受けるのだ。』」(創世42:20~22)。

問1 ひどい仕打ちをしたのはずいぶん前のことでしたが、兄弟たちはヨセフのことで悩んでいました。良心の^{かしく}責はそんなに長く続くのでしょうか。

ヨセフはすぐにも兄弟たちに自分を明かすことができました。しかし兄弟たちの品性を試すため、つまり彼らが本当に変わったかどうかを知るために、あえて苦しい試練に遭わせたのでした(『人類のあけぼの』上巻249ページ参照)。「末弟ベニヤミンを奴隷にする代わりに、自分を奴隷としてエジプトに残してください」というユダの嘆願は、特に胸を打ちます(創世44:33)。彼らが本当に変わったことに満足したヨセフは、自分の身分を明かします(創世45:3)。

人間的な見方からすれば、ヨセフは兄弟たちに復讐してもよかったです。しかし、彼は復讐の代わりに、兄弟たちを許し、少しばかり教訓を与えました。異教の国で権力の頂点にあったときでさえ、ヨセフは彼のうちに働いておられた神の恵みを示しました。

程度の差こそあれ、他者から不当な扱いや誤解を受けることがあります。赦しは赦される側の人はもちろんのこと、赦す立場にある人にも祝福となります。主の心を自分のものとする方法を考えてみましょう。

NOTE

ヨセフはキリストの型であるばかりでなく、全人類の歩みの複写とも言えましょう。エデンの楽園で始まり、罪惡の穴に落ち、数千年を経て、黙示録にある救いの日を人は待望しています。ヨセフは父に愛された子でありながら穴に落とされ、奇跡的に救われ、試練から最終的に勝利に導かれました。私たちはヨセフ物語に例示されている栄光ある真理を覚えましょう。神の愛は私たち罪びとを絶望の穴から今もお救いくださいます。

【キリストの型としてのヨセフ】(創世 50 : 20、21)

ヨセフの名は創世記のほかにも、聖書の 12 の書巻に出てきます。彼はキリストを象徴する人物として描かれています。「ヨセフの高潔さと、全エジプト国民の生命を救ったあの驚くべき働きは、キリストの生涯を代表したものであった」(『キリストの実物教訓』264 ページ)。

「ヨセフの知恵と正義感、日ごとの生活における純潔と博愛、民衆に対する関心と献身……、ヨセフはキリストを代表していました」(『教会への証』6 巻 219、220 ページ)。

「ヨセフの兄弟たちが彼の前に罪を認めたとき、彼は心から兄弟たちを赦し、自分へのかつての残酷な行為への報復の感情をあらわさず、愛と赦しの行動を示しました」(『靈の賜物』3 巻 176 ページ)。

▼ もっと深く学びたい方へ ▲

『人類のあけぼの』上巻、第 20 章「エジプトにおけるヨセフ」、第 21 章「ヨセフと兄弟たち」を読みましょう。ヨセフが兄弟たちに責められ、売られ、異郷の地において屈辱の日々を過ごし、神の摂理のうちに導かれて信任を得て宰相になる。そして兄弟たちと愛を持って再会するすべてが感動的に描写されています。彼の存在はエジプトの王にも、民衆にも祝福になったのでした。

ミニガイド

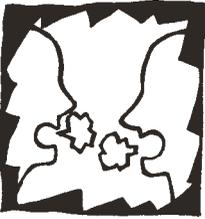
【古代エジプトの歴史とヘブライ人】

古代エジプト史には比較的正確な王たちの年代記が残っており、考古学的にも近年多くの資料が発見されています。それでも宰相の地位にまで登ったヨセフや、ファラオの子としてのモーセの名前はまったく出てきません。まして「出エジプト」という大事件に関する記録はエジプト側にはいっさいありません。オリエント時代には、自国が他国に占領された、戦争に敗れた、外国人が政府高官になったなどということは認めるわけがなく、今後もその発見を期待できないでしょう。ただし、ヨセフが活躍した同時期に、ヒクソスというセム人種がエジプト内で勢力を持っていたこと、モーセと同時代にレンガ造りをしていたセム系奴隷たちの存在など、間接的な歴史資料は残っています。

ヤコブ家の兄弟の悲劇の遠因はヤコブが兄エサウをだまし、伯父ラバンの家で働いたことにさかのぼります。彼はそこで末娘ラケルをみそめましたが、狡猾なラバンによって姉のレアと結婚させられました。それでも「ラケルを愛していた」（創世29：18、20）ヤコブは苦労の末、やっとラケルを妻としました。12兄弟の母親はレアとその召使ジルパ、ラケルとその召使ビルハだったのでした。「だまし、だまされた」家族関係、その複雑な家庭環境は不幸な事態を招きました。さらにヤコブがラケルを偏愛したことは、「ねたみとそねみの原因となった。そして、彼の生涯は、姉妹のふたり妻の争いによって悲惨なものになった」とあります（『人類のあけぼの』上巻205ページ）。

「火のような試練」（『人類のあけぼの』上巻237ページ）とエレン・ホワイトはヨセフが受けた信仰の試練を表現しています。誘惑者はエジプト人の上役で、ヨセフは主人の命令に従うしか立場のない奴隷の身分でした。しかも魅力的な女性からの誘いです。従わないことは刑罰と死を意味しました。2人だけの秘密にしておけばそれなりに当座はしのげたかもしれません。しかしここでヨセフは廉潔という「宗教的原則の力」を発揮しました。これと関連して、エレン・ホワイトの有名な次の言葉があります。

「もし、神がわれわれのなすこと、言うことのすべてを見聞きして、その言行動作をそのまま記録しておられること……を常に年頭においていれば、罪を犯すことを恐れるであろう。青年たちはどこにいて、何をしようとも神の面前にあることを覚えていよう」（『人類のあけぼの』上巻237ページ）。



争う兄弟たち

● 暗唱聖句 ●

「どのようなときにも、友を愛すれば / 苦難のときの兄弟が生まれる」
(箴言 17 : 17、新共同訳)

「友はいずれのときにも愛する、兄弟はなやみの時のために生れる」
(箴言 17 : 17、口語訳)

安息日午後

今週のテーマ

5月5日

人間はそれぞれの関係や立場で互いに善へも悪へも影響しあいますが、近い兄弟関係は協力し合って善に至る可能性を秘めています。ですから悪魔はその積極面に対抗するため、兄弟の間に争い、不和、遺恨を生じさせようと努力します。

聖書に見る兄弟についての記述 ヤングの『聖書語句辞典』によれば、聖書は約500箇所ですべて兄弟姉妹について言及しています。これは兄弟関係が重要であることを暗示するものです。兄弟のきずなの強さを強調する「友の振りをする友もあり / 兄弟よりも愛し、親密になる人もある (箴言 18 : 24)」という聖句がありますが、実は「見せかけの友がいることも事実、兄弟よりも忠実な友がいることもまた事実」と言っているのです。たとえ兄弟が家族として遺伝学的、生態学的につながっていても、争いによって容易に壊れてしまいます。性別や年齢の違い、出生の順番、親の偏愛、身体や性格の特徴、先天的な能力、宗教の違いといった理由から生じる兄弟間の争いもあるでしょう。

今週は、兄弟間の争いの原因について分析します。一方が完全に正しく、他方が完全に間違っているということがあると思いますか。

「主はアベルとその献げ物に目を留められたが、カインとその献げ物には目を留められなかった」(創世4:4、5)。カインは「なぜ殺したのか。自分の行いが悪く、兄弟の行いが正しかったからです」(ヨハ3:12)。「信仰によって、アベルはカインより優れたいけにえを神に献げ、その信仰によって、正しい者であると証明されました。神が彼の献げ物を認められたからです(ヘブ11:4)。カインの「土の実り」は自分の行いや人間の産物という自己の義と行いを、アベルの「羊の群れの初子」の献げ物は血の犠牲そのもので、罪の身代わりの救いを意味するものでした。兄と弟は2つの生き方、価値観をあらわしています。神は自分の限界を認め、創造者であり贖い主であるイエスに頼って生きるアベル型に“目を留め”、“優れた献げ物”として受け入れられるのです。

問1 創世記の記事だけではカインとアベルという兄弟間の問題は理解できませんが、他の聖書記事を読むことで争いの本質、神の判断を納得することができます。両者の差はなんだったのでしょうか。

カインは創世記4章に1回言及されているだけです。新約聖書の中では3か所で否定的に描かれています(ヘブ11:4、ヨハ3:12、ユダ11)。同じくアベルも創世記に1回、執念深く、罪深い兄弟の犠牲者として言及されています。新約聖書においては4回、肯定的に描かれています。

聖書はカインとアベルの物語について詳しくは述べていません。おもに殺人について描いているだけです。しかし、殺人は理由もなしに突然起こるものではありません。この悲しい事件の背景には、多くの小さな出来事が積み重なっているはず。悲劇までには何年にも及ぶ緊張があったのです。『人類のあけぼの』上巻65～74ページ(明暗を分けたカインとアベル)を読んでください。

あなたは自分自身のうちにカインのどんな面を見ますか。
アベルのどんな面を見ますか。

NOTE

「先に出てきた子は赤くて、全身が毛皮の衣のようであったので、エサウと名付けた。その後で弟が出てきたが、その手がエサウのかかと(アケブ)をつかんでいたのので、ヤコブと名付けた(創世25:25、26)。この兄弟は生まれた時から違っていました。

「二人の子供は成長して、エサウは巧みな狩人^{かりゆうど}で野の人となったが、ヤコブは穏やかな人で天幕の周りで働くのを常とした。イサクはエサウを愛した。狩りの獲物が好物だったからである。しかし、リベカはヤコブを愛した」(創世25:27、28)。

問1 出生や環境についてはどうすることもできませんが、それでも子供の成長に大きな影響を与えるものです。物語の中で兄弟の不和を招くにいたった親の過ちはなんなのでしょうか。

リベカとヤコブがイサクをだますために考え出した計略の細かさに注意してください(創世27:5~29)。ヤコブが計画に乗り気でないのを見ると母は言います。「わたしの子よ。そのときにはお母さんがその呪いを引き受けます」(13節)。たくらみが計画どおりに行かなかったとき、リベカは後にこう言っています。「一日のうちにお前たち二人を失うことなど、どうしてできましょう(45節)。ヤコブを逃がすことによってなんとか彼の命を救ったリベカですが、愛^{いと}し子ヤコブに再び会うことはありませんでした。子を溺^{できあい}愛した母親がその偽りのために支払った代償の大きさは計り知れないものでした。

エサウから離れて安全なはずなのに、ヤコブの悩みはその後20年も続きました。しかし、兄弟の再会する時が来ます。創世記32、33章に描かれた再会の場面を読んでください。特にヤコブが夜、天使と格闘した場面に注目し(創世32:22~32)、この出来事がどんな意味でヤコブとエサウの再会の助けとなったか考えてください(『人類のあけぼの』上巻212~221ページ「苦闘の一夜」参照)。この物語はいろいろな意味で、悔い改めた罪人のうちに働く神の恵みについて教えています。

モーセには兄アロン(祭司)と姉ミリアム(預言者)がいました。2人はモーセの妻のを持ち出しましたが、彼女はミディアン人であってクシュ(エチオピア)出身ではありません。この辺の状況は不明のままですが、姉、兄の不満の内容は明瞭です。祭司であり、預言者でもある自分たちを超えて神がモーセにみ言葉を伝えることへの批判であり、とりもなおさず神ご自身に対する不満でした。

これまで3姉弟の間にはすばらしい一致がありました。幼い弟モーセの命を救った姉ミリアムの勇気を見てください(出エ2:1~10)。同様に、アロンはモーセに協力して働いています。「主はモーセに言われた。『見よ、わたしは、あなたをファラオに対しては神の代わりとし、あなたの兄アロンはあなたの預言者となる。わたしが命じるすべてのことをあなたが語れば、あなたの兄アロンが、イスラエルの人々を国から去らせるよう、ファラオに語るであろう』」(出エ7:1、2)。女預言者のミリアムはモーセの指導のもとイスラエルが紅海でエジプト人に勝利した時、先頭に立って歌と踊りで勝利を祝いました。モーセの重くなった手を支えたのはアロンでした(出エ15~17章)。

問1 ミリアムとアロンはモーセの妻のことを非難しましたが(民数12:1)、それは表面のことで、実際はもっと根深い反発がありました。为什么呢。

アロンとミリアムはモーセの高い地位をねたんでいます。彼らはどちらも主の豊かな恵みを受けたことのある人たちでした。それなのにアロンとミリアムはルシファーがキリストの地位をねたんだ同じ罪に陥りました。民数記12:3にあるモーセとその品性に注目してください。この聖句は多くの点で、なぜアロンやミリアムでなくモーセが高い地位に選ばれたのかを説明しています。

主が重い皮膚病をもってミリアムを罰せられたとき、彼女のために執り成しをしたのは自分たちが憎んでいたモーセでした。『神よ、どうか彼女をいやしてください』がモーセの祈りでした(民数12:13)。

NOTE

「イエスは、マルタとその姉妹とラザロを愛しておられた」(ヨハ11:5)。

イエスはマルタとマリアの家庭を訪問しましたが、2人の間にささいな口論が起きます。イエスは重要な霊的教訓を与えました。

問1 ルカ10:38～42の記事を注意深く読んで、次の各コメントを考えてください。(『各時代の希望』中巻335ページ、『SDA聖書注解』5巻785ページ参照)

39節「家事を担当しているマルタは実際の性格の持ち主でしたが、マリアは霊的なことの方により関心がありました。」

40節「マルタは過去の経験から、直接マリアに訴えても得るところがないことに気づいたのでしょう。……彼女はイエスに訴えることでマリアを非難したばかりでなく、間接的にイエスをとがめたのでした。彼女は、イエスが現状に『関心』を払いもしなければ、それを換えようともしないこと、またマリアに食事の手伝いをさせることよりも、彼女が自分の話に耳を傾けるのを喜んでおられることこそ問題であると言いたかったのです。」

41節「名前を繰り返すことは愛情と関心の表れです。……イエスに従う者は、マルタが気分を害してイエスに訴えたような不必要な気遣いや心配性の精神を避けなければなりません。」

42節「マルタは勤勉で、迅速で、精力的だったが、姉妹のマリアのような落ちついた、信心深い精神に欠けていた(『各時代の希望』中巻336ページ参照)。彼女はマタイ6:33にある教訓、つまり神の国に関心や思いの第一とし、物質的な事柄を第二とすることを学んでいませんでした(24～34節参照)。マリアは『盗人も近寄らず、虫も食い荒らさない』『尽きることのない富を天に積』んでいたのです(ルカ12:33 マタ6:19～21参照)。」

マルタは勤勉に働いて主に仕えました。主のために熱心に働くあまり、大事な家族をおろそかにすることはないでしょうか。

放蕩息子の物語は聖書の最も感動的なたとえです。悔い改めた罪びとに対する神の愛の描写だからです。ところがそこにはもう一つの教訓があります。喜ばしいはずの弟の帰還に水を差す彼の兄の言葉と態度です。兄は父親に向かって不平を並べ立てます(ルカ15:29、30)。「このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています(長年にわたって仕えてきた)」「言いつけに背いたことは一度もありません(命令に従ってきた)」「それなのに、子山羊一匹すらくれなかった(報酬が同じでない)」「ところが、あなたのあの息子[弟と言っていないことに注意]が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる(同じ報酬をくれないばかりか、報酬を受ける資格のない、ならず者の弟に自分より多くの報酬を与える)。

人間的に見れば、兄の不平には正当な理由がありました。父の行為がある意味で、公平でなかったからです。しかし、これが福音です。神は「公平」なお方ではありません。人の失敗のために苦しむ人があるなら公平とは言えません。しかしキリストは人々の罪のために苦しみ、まさにその経験をされました。もし神が「公平」なお方で、私たちに分相応の亡びが来るなら、私たちはどうなっているでしょうか。

兄の不平は正しいとは言えませんが、自然なものです。人の罪を非難することは容易です。場合にもよりますが、過ちを犯した人に必要なのは厳しい非難でなく、憐れみ、助け、同情です。キリストの品性が表されるときがあるとすれば、それは過ちに陥った人に憐れみを示すことにおいてです。なぜなら私たちはみな過ちを犯すからです。

アンダーズは妻、子供、教会、そして主に対して悲しむべき罪を犯しました。彼は告白して心から悔い改め、関係者から赦されました。しかし、教会での元の地位に復帰できないと聞き、これでは真の赦しではないと反発しました。どう考えますか。

NOTE

家族同士の争いは当事者2人だけでなく、波のように広がり、他の人々を巻き込み、ときには数世代に及ぶ場合もあります。

▼ もっと深く学びたい方へ ▲

聖書の中の“争う兄弟たち”の例

- ・ラケルとレア（創世 30 : 15）
- ・エルとオナン（創世 38 : 3 ~ 10）
- ・ヨタムとアビメレク（民数 9 : 21）
- ・アムノン、タマル、アブサロム（サム下 13 : 14、15、32）
- ・ソロモンとアドニヤ（列王上 2 : 19 ~ 25）

今週は肉親としてつながっている兄弟のケースについて学びました。しかし、イエスはこれを霊的に解釈し、血縁関係以上の関係にまで拡大しておられます。

「イエスは、『わたしの母、わたしの兄弟とはだれか』と答え、周りに座っている人々を見回して言われた。『見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ』」（マコ 3 : 33 ~ 35）

「もし、兄弟あるいは姉妹が、着る物もなく、その日の食べ物にも事欠いているとき、あなたがたのだれかが、彼らに、『安心して行きなさい。温まりなさい。満腹するまで食べなさい』と言うだけで、体に必要なものを何一つ与えないなら、何の役に立つでしょう。信仰もこれと同じです。行いが伴わないなら、信仰はそれだけでは死んだものです」（ヤコ 2 : 15 ~ 17）

今週学んだ兄弟関係の中で、イエスの勧告に従って問題を解決しているのはどれですか。「兄弟があなたに対して罪を犯したなら、行って二人だけのところで忠告しなさい。言うことを聞き入れたら、兄弟を得たことになる」（マタ 18 : 15 ~ 17 参照）。

ミニガイド

喧嘩けんかをしても、打っても打たれても、ののしつてもものしられても、絶交しても、骨肉は骨肉だ。まさかのときには飛んできて力になってくれる。

(徳富蘆花とよか)

兄弟は金銭よりも尊いものである。金銭は自分が保護しなければならないが、兄弟は自分を保護してくれる。金銭は感情のないものだが、兄弟は同情のあるものである。

(ソクラテス)

兄弟でも財布は姉妹でない。

(西洋の格言)

他人同士なら時間が経てばいつともなしに消えてしまう恨みでも、兄弟の間ではいつまでも残るかもしれない。

(庄野潤三)

(住むべきところの) 隔てのあれば、兄弟なりとも心を置くべき物(用心する)。

(曽我物語そが)

今日の青年や子供によって社会の将来は決定し、また、これらの青年や子供たちがどうなるかは家庭によって決まる。

(エレン・ホワイト)

見よ、兄弟が和合して共におけるのは

いかに麗うるわしく楽しいことであろう。

(詩編133:1)

(マルタ、マリア姉妹へのイエスの言葉について)

いつ、何をすべきかを知ることは霊的識別力の問題なのである。

(F.B. クラドック『ルカによる福音書注解』より)



第7課

5/12~5/19

子供から学ぶ

● 暗唱聖句 ●

「子供も、行いが清く正しいかどうか／行動によって示す」

(箴言 20 : 11、新共同訳)

「幼な子でさえも、その行いによって自らを示し、そのすることの清いか正しいかを現す」

(箴言 20 : 11、口語訳)

安息日午後

今週のテーマ

5月12日

幼い子供は成長してやがて善と悪の双方に大きな影響を与えます。大人は育ち行く子供たちの心や頭脳に大きな差を生じさせる感化力と責任を負っています。子供への正しい訓練は不可欠です。

イエスは子供を知っておられた アダムとエバとは異なり、イエスは人から扶養される幼子としてお生まれになりました。地上の親であったヨセフとマリアは天より預かったイエスをかわいがり、成長に必要な環境を整えました。「イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人ともに愛された(ルカ 2 : 52)。

大人になってからのイエスは、絶えず子供たちの必要に応えられました。イエスご自身、かつては子供であり、子供の経験することを知っておられたので、ご自分のもとに連れて来られた子供たちを理解することがおできになりました。

「天の国はこのような者たちのものである」(マタ 19 : 14)。子供は天国に入るために必要な何かを持っています。今週は、たぶん大人からは絶対に学ぶことのできないものを、子供から学びます。

「少年サムエルはすくすくと育ち、主にも人々にも喜ばれる者となった」(サム上2:26)。「エリの息子はならず者で、主を知ろうとしなかった」(サム上2:12)。

NOTE

問1 祭司エリの子供たちの問題行動はなんでしたか。サム上2:12 ~ 17、22

エリの息子たちは自らの欲望、欲求を満たすために祭司の役職を利用しました。エリは息子たちを叱責しましたが(サム上2:22 ~ 25)、もはや手遅れでした(『人類のあけぼの』下巻230 ~ 235ページ参照)。主はエリに警告して、息子たちのゆえに大いなる刑罰が彼と彼の家に臨むと言われました。「その日わたしは、エリの家に告げたことをすべて、初めから終わりまでエリに対して行う」(サム上3:12)。これは若いサムエルに与えられた最初の預言でした。

問2 親としてのエリが受けた苦痛の重さを考えてみましょう。あの“放蕩息子”についての責任は親にあるのでしょうか。

ハンナは幼いサムエルを熱心に教育しました。彼女はエリと同じ失敗を犯すことはありませんでした(エリの妻については何も語られていません)。聖書はエリの過ちと思われるひとつを暗示しています。エリは、神の箱がペリシテ人に奪われ、自分の2人の息子たちも殺されたという報告を聞きます。報告が「神の箱のことに及ぶと」(サム上4:18)、エリは席からあおむけに落ちて、死にます。言い換えるなら、彼は息子たちの死よりも神の箱のほうに関心があったように思われます。神は家族よりも優先されるべきお方ですが、エリは神に忙しく仕えるあまり、自分の息子たちを軽んじたのでしょうか。

サムエルは成長して偉大な神の人となりましたが、彼もまた子供の教育に関しては成功しませんでした(サム上8:1~3)。これらの不幸な出来事からどんな教訓を学ぶことができますか。

NOTE

ダビデとゴリアトの物語は“子供に聞かせる話”だけでなく、大人に対する教訓を含んでいます。ここには人の能力を外見で評価し、性急に即断する過ちについて教えています。ダビデがゴリアトと戦うと言ったとき、次の人たちは何と言って反対したでしょうか。

ダビデの長兄エリアブ(サム上17:28)

サウル王(サム上17:33)

ゴリアト(サム上17:42~44)

これらの反対は不合理なものではありませんでした。しかし信仰や神の領域においては、人間の判断に頼るべきではありません。確かにダビデは巨人を倒す任務に向いていなかったかもしれませんが、ところが私たちの仕える神は人間の理性をはるかに超えた、知恵と力の神です。ですから、だれかが神の力によって人間の目で見れば不可能に見えることをしたからといって驚くことはありません。

1762年、少年は5歳になったばかりでした。しかもその日の朝、初めてバイオリンを手にしたのです。父親の友人たちがバイオリン合奏のためにやってきたとき、少年は仲間に入れてくれるように頼みました。ところが、「お前はまだレッスンを受けたことがないから一緒に弾くのは無理だよ」と言われて、少年は悲しそうに去ってしまいました。それを見ていた父親の友人のシャクトナー氏が、「子供を入れてやったらどうかね」と勧めました。父親は仕方なく言いました。「わかった。でもだれにも聞こえないように静かに弾くのだよ」。数分もしないうちに、みな弾くのをやめました。だれもがあつげにとられた表情で少年の弾くバイオリンに耳を傾けました。練習したこともない少年が、どうしてこんな難しい曲を、しかもこんなに上手に弾けるのだろうか。父親のモーツァルト氏でさえ若いヴォルフガングの音楽的才能に驚かされたのでした。

エレン・ホワイトは病弱で、ほとんど教育も受けていない10代の少女のとき、使命者として召されました。

「エリシャはそこからベテルに上った。彼が道を上って行くと、町から小さい子供たちが出来て来て彼を嘲り、『はげ頭、上って行け。はげ頭、上って行け』と言った」(列王下2:23)。子供たちとは「神を敬わない若者」(『国と指導者』上巻203ページ)。

エリシャは国民の霊的必要性に奉仕するために生涯を捧げました。ところが大勢の若者が集まって彼をあざけりました。「上って行け」という彼らの言葉から、彼らが厳粛で聖なる事件であるエリヤの昇天について知っていたことがわかります。エリヤがいなくなったので、彼らは次にエリシャに向かって、お前も昇天してみる、とからかったのです。彼らの行動の背景には、2つの力が働いていました。

サタン「この若者たちはサタンにそそのかされていました。サタンは人々に深い印象を与えたこの厳粛な出来事の効果を打ち消そうと働いていました」(『SDA 聖書注解』2巻856ページ)。

親たち「エリヤは天に移され、彼の外とうはエリシャの上に落ちていた。その時、親たちから神の人を軽べつすることを学んでいた悪い少年たちがエリシャについて来て、あざけりながら、『はげ頭よ、のぼれ。はげ頭よ、のぼれ』と叫んだ」(『初代文集』405ページ)。

問1 若者たちへのエリシャの反応を見てください。彼らのために祈りましたか。他の類(ほゐ)を向けましたか。悔い改めを迫ったでしょうか。列王下2:24

「この若者たちの上を下った恐るべき裁きは神から出たものでした。それ以後、エリシャは働きを妨害されることがなくなりました。彼は50年にわたってベテルの門を出入りし、町々を巡回し、怠惰で身持ちの悪い、乱暴な若者たちの中を通り過ぎましたが、だれひとり高き神の預言者としての彼の資質をあざけったり、軽んじたりする者はいませんでした。彼が働きを始めるにあたって取ったこの容赦ない処置は、全生涯にわたって尊敬を受けるに十分なものでした」(『教会へのあかし』第5巻44ページ)。

聖なる人や物を嘲笑(ちやうしやう)、侮辱(ぶじよく)する危険が今日も存在しますか。

NOTE

偉大な軍司令官ナアマンは不治の病に冒されていました。彼は遠征したときに「一人の少女」を捕虜として連れて来ますが、その少女が次のように言いました。「御主人様がサマリアの預言者のところにおいでになれば、その重い皮膚病をいやしてもらえますように」(列王下5:3)。シリア軍の捕虜となって連行され、自分の仕える神の力、また神の存在さえ疑っても不思議ではないというのに、この少女が表した神の力に対する信じがたいほどの信頼は注目に値します。

問1 召使の少女の軍司令官ナアマンへのアドバイスはどのようなものでしたか。列王下5:3

この少女はナアマンとその仲間たちに神をあかしただけではありません。彼女は今日も、逆境の中にあっても信仰と希望を持ち続ける人たちの象徴です。

「シリアの略奪隊が無力な少女の国を襲い、彼女は何の落ち度もないのに犠牲者となりました。彼女は異邦の地に連れて来られ、一日のうちに自分の家、父母、兄弟姉妹、これまで生活を豊かにしてくれたすべての持ち物を奪われたのでした。その上彼女は自由を奪われていました。……しかしすべての持ち物を奪われたとしても、彼女にはなお頼るべき宝物がありました。ありがたいことに、世には物理的な力や暴力によって奪われることのない価値観があります。人生には時として過酷で恐ろしいことが起きます。……しかし、彼女は自分の経験から、別の、さらに優れた事実を知っていました。すなわち、いかに強力で、残酷な力も決して奪うことのできない宝があることを彼女は知っていました(コヴィス・G・チャペル『女性の顔』91、92ページ)。(『国と指導者』上巻212～220ページ参照)

名前さえ記されていないこの少女は、両親から教えられた信仰に忠実でした。彼女が逆境の中にあっても自分の信仰を守り、さらにそれを力強くあかしすることができたのはなぜでしょうか。私たちも子供たちを同じように育てているでしょうか。

「彼のように全くモーセの律法に従って、心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして主に立ち帰った王は、彼の前にはなかった。彼の後にも、彼のような王が立つことはなかった」(列王下23:25)

ヨシヤが統治を始めたのはまだ8歳の時でしたが、ヘブライ民族は彼のような王を持ったことはありませんでした。列王記に描かれている31年間におよぶ彼の統治の事業は、異教の影響力を一掃し、神に対する真の礼拝を回復することでした。

問1 ヨシヤの宗教改革に民はどう反応しましたか。指導者の靈性はどれほど大切でしょうか。列王下 23：3

列王記下23章はヨシヤの始めた改革について記していますが、当時異教の慣習が国民のあらゆる面にまで浸透していたことがわかります。神殿の中には、異教の神々を礼拝するための祭具類が備えられ(4節)、太陽、月、星などの異教の神々に香をたく神官がいました(5節)。偶像礼拝について明白な警告を与えられていた選民が、いかにしてこれほどの背信に陥ってしまったのでしょうか。それは突然起こったのでしょうか。それとも徐々に起こったのでしょうか。今日の教会にも同じようなことが起こっていないのでしょうか。私たちも同じくらい無知になってはいないのでしょうか。

列王記下22章によれば、ヨシヤが徹底的な改革を開始するきっかけとなったのは「律法の書」の発見でした。律法の書の言葉を聞いたヨシヤは、「衣を裂」きました(11節)。主によって律法の書の中で命じられたことを民が尊重しないために、災いが臨もうとしていることがわかったからです。彼は徹底的な改革を始めます。異教礼拝に慣れていた人たちは反発したでしょう。それでも正しいことを遂行しようとするヨシヤの計画を阻むことはできませんでした。

ヨシヤの改革さえも滅亡を回避することができないことを彼は告げられていました(列王下22：18～20)。それでもヨシヤは改革に着手したのでした。

NOTE

親は子供たちを揺りかごから十字架のもとへと導き、そこで子供たちは個人として自分の決断をしなければなりません。親は子供たちがやがて人生において信仰的な個人の決断をすることができるよう祈りつつ育て、助けたいと思います。

▼ もっと深く学びたい方へ ▲

次の聖句を初めて読むつもりで読んでください。

「そのとき、弟子たちがイエスのところに来て、『いったいだれが、天の国でいちばん偉いのでしょうか』と言った。そこで、イエスは一人の子供を呼び寄せ、彼らの中に立たせて、言われた。

『はっきりしておく。心を入れ替えて子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない。自分を低くして、この子供のようになる人が、天の国でいちばん偉いのだ』(マタ 18: 1 ~ 4)。

イエスは幼子のようになることを私たちクリスチャンに勧めました。この言葉は何を意味しているのでしょうか。“子供のようになる”ことはすべてよいことなのでしょうか。極端に解釈すれば恐ろしい理解になります。子供としての特色のあるものは信仰者にとって非常に危険です。それらは为什么呢。

成長してゆく子供の行動を左右するのは遺伝的なものでしょうか。それともその後の環境でしょうか。親が持つ遺伝的な性質や子供が育ってゆく環境はある程度コントロールできるでしょうか。霊的な環境を備えるために私たちに何ができるでしょうか。

低年齢のころは親の指導やしつけに従いますが、10代になると独自の価値判断が出てきます。彼らが人生設計において「神」「聖書」「信仰」の生き方に心を向けるように導くことは親に与えられた最高の特権です。子育ての責任を感謝しましょう。

ミニガイド

現代は子供たちにとってまことに不幸な時代です。墮落的な世俗主義が社会全体に広がり、彼らの興味、関心を下に引っ張る誘惑が迫ってきます。戦後日本の政策は物質優先の経済成長に重点を置きました。戦後の民主主義は誰もが“権利の主張”だけを強調し、責任、義務を後回しにしました。こうした中で家庭のしつけ、学校の規律は後退を続けています。

それでも私たちはキリスト教的家庭教育、学校教育の大切さを信じます。この基本の尊重も実行も決して楽なことではありません。世にある限り、信仰者といえども多くの矛盾や戦いに苦しむことでしょう。いたずらに社会や政治のせいにならず、また他に責任を求めることなく、ひたすら神のみこころが行われることを祈りましょう。

私たちは大人として、子供たちに本当の価値観を教えたいと思います。幸せとは何か、生きる意味や生き方、勉強すること、職業、家庭の大切さ、そして教会生活の喜びなどです。このためには、私自身がしっかりそれらを確認する必要があります。

もう一つ伝えたい思想は“人を大切にする”ということです。主は「隣人を自分のように愛しなさい」(ルカ 10:27)と命じました。自分を大切にすることも、他者を大切にすることも、キリスト教の大きな信仰の柱です。

たとえ平凡であっても安定した家庭は子供への大きな祝福、資産です。円満で、バランスの取れた親は子供の心に安らぎを与え、大事な模範となりましょう。真の宗教は心にも家庭にも、判断や考え方、行動や感情、すべてに安定感を与えます。“愛し、愛されるクリスチャン”こそが主のため、家族のための最大の伝道ではないでしょうか。

「ともしびはどんなに小さくても、つねに燃えてささいれば、他の多くのともしびに火を点ずるものとなれる」(『生活を豊かに』25ページ)。



第8課

5/19~5/26

伝道と個人的な働き

● 暗唱聖句 ●

「いかに美しいことか / 山々を行き巡り、良い知らせを伝える者の足は。 / 彼は平和を告げ、恵みの良い知らせを伝え / 救いを告げ / あなたの神は王となられた、と / シオンに向かって呼ばれる」

(イザヤ書 52 : 7、新共同訳)

「よきおとずれを伝え、平和を告げ、よきおとずれを伝え、救を告げ、シオンにむかって『あなたの神は王となられた』と言う者の足は山の上にあつて、なんと麗^{うつく}しいことだろう」 (イザヤ書 52 : 7、口語訳)

安息日午後 今週のテーマ

5月19日

私たちは伝道においても楽な方法を好みます。トラクトを郵便箱に入れる、献金をする、誰かと一緒に訪問するなど、何かをすると主のみ業をしたと思って安心し、満足感を覚えます。しかし、自分の時間を割き、自分のしたいことをやめて人をイエスのもとにお連れするのは、選択としては魅力あることではありません。

伝道の働き 米国ミシガン州、オトスィゴの近くに住むドイツ人移民が土曜日に町の理髪店に行きました。ところが、町でただ1軒しかないその理髪店は閉まっており、看板に「月曜日から金曜日まで営業」と書かれていました。彼はひどいドイツ語なまりで、「週のいちばん忙しい日になぜ店を閉めているのか」と尋ねました。その理髪屋さんは、「私もドイツからの移民でセブンスデー・アドベンチストです」と答えました。彼は教会の集会案内を手渡し、伝道集会に招待することもできましたが、彼のやり方は違っていました。夕食に招待したのです。自分の時間とエネルギーを捧げて交わり、やがて友情が芽生え、ついにバプテスマに導かれました。

「しかし、群衆に^{はば}阻まれて、イエスのもとに連れて行くことができなかったのも、イエスがおられる辺りの屋根をはがして穴をあけ、病人の寝ている床をつり降ろした」(マコ2:4)。

NOTE

イエスが家におられることを知って中風の人を運んできたのは4人の男でした。ところがこの人たちについて何も書かれていません。彼らはだれだったのでしょうか。中風の人とどんな関係にあったのでしょうか。家族でしょうか。友だちでしょうか。いずれにせよ、彼らは自分のことでなく、失意の中にある中風の人を助けたい一心から(『各時代の希望』上巻337ページ参照)家の屋根に登り、穴をあけ、病人をイエスの足元につり降ろしたのでした。キリストを信じるすべての人がこの4人の男たちのようであれば、なんとすばらしいことでしょう。

問1 「イエスはその人たちの信仰を見て、中風の人に、『子よ、あなたの罪は赦される』と言った」のでした。いったい誰の信仰が救ったというのでしょうか。マル2:5

「病人の思いつきで、友人たちは彼を屋上にはこびあげ、屋根を破ってイエスの足もとに病人をおろした。……イエスは事情を理解された。イエスはその困り疑っている魂をみもとにひきよせられたのであった。この中風患者がまだ家にいたときに、救い主は彼の良心に自覚をお与えになった。……イエスは、最初のかすかな信仰の光が、イエスを罪人の唯一の助け手として信じる信仰に育って行くのを見守り、それが救い主のみもとに行きたいと努力するたびにだんだん強くなって行くのをごらんになっていた」(『各時代の希望』上巻338、339ページ)。

この伝道物語は3つの要素から成り立っています。(1)キリストに心を開いた病人。(2)病人をイエスのもとに連れてきた友人たち。(3)いやしと救いをお与えになったキリスト。

NOTE

「エルサレムには羊の門の傍らに、ヘブライ語で『ベトザタ』と呼ばれる池があり、そこには5つの回廊があった。この回廊には、病気の人、目の見えない人、足の不自由な人、体の麻痺した人などが、大勢横たわっていた。さて、そこに38年も病気で苦しんでいる人がいた」(ヨハ5:2、3、5)。

38年も病気で苦しんでいるというのに、池の中に入れてくれる人が誰もいないとは信じがたいことです。ほかの人たちが彼を踏みつけながら先に入ろうとする光景は、罪深く、自己中心的な人間の姿をよく表しています。マルコ2章にある中風の人の場合のように、この人にも助けてくれる友人がいてよさそうなものです。しかし、彼の場合、偉大な医師であるイエスご自身以外に助けてくれる人はいませんでした。

問1 足の不自由だったこの病人をだれもイエスのもとに連れていきませんでした。私たちに対する教訓があるでしょうか。それとも主のほう近づいてくださるのでしょうか。

安息日であったにもかかわらず、イエスはその人をいやし、「起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい」と言われました(ヨハ5:8)。その人が床を担いで歩いているのを見た指導者たちは、彼を非難し、「今日は安息日だ。だから床を担ぐことは、律法で許されていない」と言いました(10節)。彼らは、病人がいやされたこと、長年病気であった人のために喜んだりするより、「律法」のほうに関心がありました。聖書には書かれていませんが、おそらく律法を破ったと非難した人たちと、病人に無関心で手を貸そうとしなかった人たちとは同一人物だったことでしょう。

私たちは、律法を破っていると非難した指導者たちと同じ過ちに陥る傾向がありますか。私たちは、人々がキリストを知るのを助けていますか。それとも律法に執着するあまり、人々がキリストを理解するのを妨げてはいませんか。

「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ」(ヨハ1:29)。

イエスを知った人たちは、喜びを抑えることができませんでした。私たちはメシアに出会った！ 私たちはメシアに出会った！

福音が人から人へと急速に伝わっていったことは次の聖句からもよくわかります。「その翌日、また、ヨハネは二人の弟子と一緒にいた。そして、歩いておられるイエスを見つめて、『見よ、神の小羊だ』と言った」(ヨハ1:35、36)。「彼は、まず自分の兄弟シモンに会って、『わたしたちはメシア……に出会った』と言った」(41節)。「その翌日、イエスは、ガリラヤへ行こうとしたときに、フィリポに出会って、『わたしに従いなさい』と言われた」(43節)。「フィリポはナタナエルに出会って言った。『わたしたちは、モーセが律法に記し、預言者たちも書いている方に出会った。それはナザレの人で、ヨセフの子イエスだ』」(45節)。

問1 イエスの時代の人たちは同じ反応を示したわけではありません。奇跡を見てある人は信じ、ある人はますます反感を持ちました。同じメッセージにどうして二つの反応があるのでしょうか。

初めてイエスを受け入れた人たちの記録を見ると、個人的なあかしの重要性がよくわかります。イエスに出会った人たちの多くは、すぐにイエスのことをほかの人にも伝えていきます。

イエスが地上におられた時代、人々は個人的にイエスに会うことができました。それ以降の人々はキリストと個人的に会ったわけではありません。彼らは聖霊と御言葉によってキリストを知り、個人的なあかしによって主を知りました。イエスについて知るためには、まずイエスについて聞く必要があります。イエスを告げ知らせることはクリスチャンに与えられた使命です。

ある青年が人から伝えられてキリストとアドベンチストの使命を知りましたが、2年後に信仰を捨てました。私たちの責任はどこまであると思いますか。

NOTE

「その子の父親はすぐに叫んだ。『信じます。信仰のないわたしをお助けください』」(マコ9:24)

なんという信仰、それとも皮肉、あるいは逆説なのでしょう。彼はこう言ったのでした。「とにかく信じます。でも、わたしがもっと信じられるように助けてください」。

問1 父親は最初にだれのところに行きましたか。マル9:18

「なんと信仰のない時代なのか」というイエスの言葉はだれに対して語られたのでしょうか。「イエスがこの言葉を語られたとき、悪霊につかれた子供の父親を意識しておられたとは思えません。なぜなら、この子をいやすうえで障害となっていたのは父親の信仰だけではなかったからです。間違っていたのは弟子たちであり(マコ9:29参照) イエスが特に意識しておられたのは弟子たちであったと思われる」(『SDA 聖書注解』5巻633ページ)。

応えられた祈り、応えられなかった祈り この物語は聖書全体の文脈に沿って理解しないと誤解を招きます。多くの忠実なクリスチャンがいやしを求めて祈りますが(使徒パウロもそのひとりでした・コリ12章) 祈った通りに答えられなかった人たちがいます。祈りが答えられないと、「自分に信仰が足りなかったから」と考えがちです。

イエスは、「信じる者は何でも保証される」と言われたのでなく、「信じる者には何でもできる」(マコ9:23)と言われたのです。これは大きな違いです。イエスは保証についてでなく、可能性について言われたのです。聖書は信仰の重要性を述べていますが、信仰は祈りがいつでも望んだ通りにかなえられることを保証するものではありません。ここでは悪霊につかれた子供のケースですが、イエスは広い意味での信仰と献身について語っておられるのです。イエスは信仰さえあれば、あなたのすべての祈りはいつでも願った通りにかなえられると約束しておられるわけではありません。

「『収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい』(マタ9:37、38)、働きにおいて、働き人が効果的な戦略、誠意、機転、感性をもって働いているかどうかは疑問です。

キリスト教の歴史は深刻な問題を記録しています。20世紀のあるユダヤ人作家は、キリスト教会によるユダヤ人迫害に関連して(改宗を目的とした迫害)次のように述べています。「もしイエスが本当にメシアであったならば素晴らしいことです。しかし、あなたがたキリスト教徒が私たちから救世主を遠ざけています」。

問1 マルコ10:13では誰が差別を受けていたでしょうか。

イエスの行動に注目してください。「『子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。』……そして、子供たちを抱き上げ、手を置いて祝福された」(マコ10:14、16)。

問2 カナンの女はどんな熱い求めをイエスにしましたか。 マタ15:22

弟子たちの態度に注意してください。「この女を追い払ってください。叫びながらついて来ますので」(マタ15:23)。ところがイエスは言われました。「『婦人よ、あなたの信仰は立派だ。あなたの願いどおりになるように。』そのとき、娘の病気はいやされた」(28節)。

問3 盲人バルティマイの訴えを読んでください。 マル10:47

「多くの人々が叱りつけてしか黙らせようとしたが、彼はますます、『ダビデの子よ、わたしを憐れんでください』と叫び続けた。イエスは立ち止まって、『あの男を呼んで来なさい』と言われた」(マコ10:48、49)。私たちは人を叱りつけて主から離してはいませんか。

NOTE

クリスチャンには大きな特権が与えられています。魂を救うためにキリストと協力して働くという特権です。まじめにこの働きに携わることはもちろん大切ですが、もっと大切なのは救霊の働きを妨げてはならないということではないでしょうか。


 もっと深く学びたい方へ
 
【個人的あかしに対するサタンの反発】

悪の勢力があらゆる手段を用いて効果的なあかしを妨害しようとするのはなぜですか。

- * 人々は肉体的にも霊的にもいやされました。サタンは何とかして人々をイエスから遠ざけようとします。(ルカ7:22)
- * イエスのもとに来た人たちは、いやされただけでなく、イエスと神についても知りました。(ヨハ8:18)
- * 重い皮膚病をいやされた人は「だれにも話してはならない」とイエスから注意されていたにもかかわらず、「大いにこの出来事を人々に告げ、言い広め始めた」(マコ1:45)。

サタンは人々の幸せを喜びません。妨害しようとします。

木曜日の研究で、人々をイエスから遠ざけることになる正しくない働き人について学びました。しかし、それよりも悪いのは悪意に満ちた動機から人々をイエスのもとに連れてきた人たちです。

実例1 マルコ14:43~46にあるユダの裏切りについて復習してください。「イエスを裏切ろうとしていたユダは、『わたしが接吻するのが、その人だ。捕まえて、逃がさないように連れて行け』と、前もって合図を決めていた」(マコ14:44)。

実例2 ヨハネ8:1~11にある、姦通の現場で捕らえられた女の物語を読んでください。「『こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。ところで、あなたはどうかお考えになりますか。』イエスを試して、訴える口実を得るために、こう言ったのである」(ヨハ8:5、6)。宗教指導者たちは人々をイエスのもとに連れてきましたが、それは憎むべき動機から出ていました。

ミニガイド

連続伝道講演会、日曜講演会、聖書研究、個人伝道、訪問伝道、文書伝道、トラクト配布、福祉活動、開拓伝道、メディア伝道、健康伝道、海外伝道、教育伝道、医療伝道、児童伝道、通信伝道、刑務所伝道、盲人伝道……と伝道にかかわる用語はその対象、規模、方法などに区分けされて無数にあります。

個人的な接触は救霊の大きな収穫につながります。過去においてそうでしたし、今後も個人伝道の意味は失われることはありません。以下にエレン・ホワイトの『伝道』からの引用文を紹介します。

大切な握手

「あなたがお会いする方への態度や姿勢が大きな部分を占めます。相手の方の手を直ちに信頼を勝ち得るような方法で握ることもできれば、この人は自分には興味も関心もないと思わせる冷たい態度で挨拶あいさつすることができます（444ページ）。

個人的な働きの主要な目的は教理の伝達ではない

「多くの魂は自分の範囲ではつかむことができない保証や力を願って、光を探し求めています。これらの人を忍耐強く、懸命に探し出して働きかける必要があります。助けを主に熱心に祈りなさい。あなたは個人的な救い主を知っているのですからイエスを提示しなさい。主の比類なき愛、豊かな恵みがあなたの口からあふれ出ますように。質問されない限り、教理について教える必要はありません。優しさと魂への愛をもってみ言葉を取り、救われたいと思ってくる魂にキリストの義を示しなさい」（442ページ）。

この働きは代理人によってはできない

「個人的な努力をはらって人々に近づきなさい。その人と知り合いになりましょう。この働きは誰かに委任し、代理人がするようなものではありません。借りたり、もらったお金などでこの働きは完成しません。講壇からの説教もこの働きを成し遂げることができません。家庭で聖書を教えるのは伝道者の仕事ですが、この働きは説教と結合してなされるべきです。個人的な接触が抜けてしまえば、多くの場合、説教も失敗してしまうでしょう」（440ページ）。



第9課

5/26～6/2

力強い祈りの人

● 暗唱聖句 ●

「あなたがたも祈りで援助してください。そうすれば、多くの人のお陰でわたしたちに与えられた恵みについて、多くの人々がわたしたちのために感謝をささげてくれるようになるのです」

(コリントの信徒への手紙二・1章11節、新共同訳)

「そして、あなたがたもまた祈をもって、ともどもに、わたしたちを助けしてくれるであろう。これは多くの人々の願いによりわたしたちに賜った恵みについて、多くの人が感謝をささげるようになるためである」

(コリント人への第二の手紙1章11節、口語訳)

安息日午後

今週のテーマ

5月26日

罪深い人間には祈りについてのすべてを理解し尽くすことはできませんが、それでも聖書は、祈れ、祈れ、祈れと勧めています。忠実な男女は熱心に、また絶えず祈りました。癒し、執り成し、救い、赦しを求めて祈りました。主はその知恵と時期に合わせて、ご意志に従い応えられました。今日も同じです。

成功の秘訣 ある成功指向型の実業家のグループが、高名なアドベンチストの牧師を招いて、信仰生活の秘訣について聞こうとしました。参加者のひとりが言いました。「私たちが知りたいのは、聖書を読んで祈りなさいというような、陳腐な考えではなく、もっと実際的な提案です」。すると、牧師が答えました。「残念です。私に言えることは、聖書を読んで祈りなさいということだけです。それ以外に成功の秘訣はありません」。

熱心に、忍耐強く祈ることは力ある信仰生活の秘訣です。これこそ私たちの力のすべてです。自己の無力さと神への全的な信頼の必要性を悟った魂によって捧げられる嘆願の祈りが力を与えてくれます。

「イザヤが中庭を出ないうちに、主の言葉が彼に臨んだ。『わが民の君主ヒゼキヤのもとに戻って言いなさい。「あなたの父祖ダビデの神、主はこう言われる。わたしはあなたの祈りを聞き、涙を見た。見よ、わたしはあなたをいやし、三日目にあなたは主の神殿に上れるだろう』」(列王下20：4、5)。

ヒゼキヤが即位したのは、北の国イスラエルに臨んだ恐るべき運命からユダを救うためでした。彼は長くすたれていた神殿の儀式を再開することによって、直ちに南の国ユダの改革を断行しました。しかし、なぜか、彼は病に倒れます。「そのころ、ヒゼキヤは死の病にかかった」(列王下20：1)。

問1 「あなたは死ぬことになっていて、命はないのだから、家族に遺言をしなさい」との神の言葉を聞いたのに、ヒゼキヤは癒しを祈りました。どういうことでしょうか。祈りは答えられましたか。列王下20:1

列王記下20章には、ヒゼキヤ王の奇跡的ないやしとバビロンからの使者たちのことが記されています。これらの使者たちはヒゼキヤへの贈り物を携えていました。ヒゼキヤは「誇りと虚栄」(『国と指導者』上巻309ページ)から、「宝物庫のすべて……を彼らに見せた。ヒゼキヤが彼らに見せなかったものは、宮中はもとより国中に一つもなかった」(列王下20:13)。聖書によれば、それは「思い上がり」(歴代下32:25)であり、その結果ヒゼキヤは神の災いの警告を受けることになります。神によって奇跡的に命を延ばされたというのに、その間に愚かな失敗を犯すとはなんとも皮肉なことです。

神は奇跡的な方法でヒゼキヤの祈りに答えました。しかし彼は自分が全く神に依存していることを忘れてしまいました。ヒゼキヤのような奇跡を体験することはないかもしれませんが、私たちも彼と同様に全く神に依存しています。これを忘れて、ヒゼキヤと同じ過ちを犯すことがないようにどんなことに気がつけたらよいでしょうか。

NOTE

「今、もしもあなたが彼らの罪をお赦しくださるのであれば……。もし、それがかなわなければ、どうかこのわたしをあなたが書き記された書の中から消し去ってください」(出工32:32)。

この聖句に用いられているヘブライ語は、救いに関して驚くべき真理を含んでいます。「お赦しくださる」と訳されている語は、「負う」または「担う」を意味する一般的な聖書のヘブライ語(ナーサー)から来ています。事実、イザヤは、十字架上のキリストの死に言及して、これと同じ語形を2度用いています。「彼が担った[ナーサー]のはわたしたちの病……多くの人の過ちを担い[ナーサー]」(イザ53:4、12)。

預言者モーセはこの有名な祈りの中で、「今、もしもあなたが彼らの罪を負って[ナーサー]くださるのであれば……」と主に祈っているのです。モーセは救いの計画を、またキリストの十字架を理解していました。彼は神ご自身に対して自分の民の罪を負ってくださるように嘆願したのです。ここに、福音がはっきりと描かれています。ここに、十字架よりはるか以前に、また地上の聖所が建てられる以前に、神ご自身がご自分の被造物の罪に対する刑罰を負ってくださるといふ、身代わりの原則が力強く描かれています。

問1 モーセの祈りはいつ、どのような形で応えられましたか。

多くの聖書注解者は、この特定の役割を担ったモーセを仲保者の予型と見ています。それは仲保者としての役割を担ったキリストに似ています(ロマ8:34、ヘブ7:25参照)。イスラエルのために執り成した後で、山から降りてきたモーセの顔は輝いていました。「この神の光は、目に見えるモーセを仲保者とした時代の栄光の象徴であった。彼は、ただひとりの真の仲保者キリストを代表していたのである」(『人類のあけぼの』上巻388ページ)。

自力による救いの愚かさについて十字架は何を教えてくださいか。

「主よ、常に変わらぬ恵みの御業をもってあなたの都、聖なる山エルサレムからあなたの怒りと憤りを翻^{ひるがえ}してください。わたしたちの罪……のために、エルサレムもあなたの民も、近隣の民すべてから嘲^{あざけ}られています」(ダニ9:16)。

ダニエルは祈りの人でした。聖書にある確信に満ちた祈りの一つはダニエル書9章の祈りです。彼はこの祈りの中で、捕囚になり、聖なる神殿を破壊された自らの民のために執り成しています。

問1 ダニエルはエルサレムに関するどんな、誰の預言を調べていたのでしょうか。ダニ9:1、2

ダニエルは祈りの人であると同時に、御言葉の人でもありました。彼の祈りのテーマは神の民と国民の回復で、それは聖書を読んで得た主題でした。これは祈りと御言葉の研究の必要性を教えるもので、相互の価値を高めるものです。

ダニエルの祈りの性質に注目してみましょう。ダニエル自身はほかの多くの人物と違って、道徳的欠点についての記録が全くありません。それなのに彼の祈りはいつでも一人称複数になっています。彼は偉大な神の人、預言者であったにもかかわらず、祈りの中で自身を罪深い国民のひとりとしています。「わたしたちは罪を犯しました。……わたしたちは預言者の言葉に聞き従いませんでした。……わたしたちは神に背きました。……わたしたちは主なる神の声に聞き従いませんでした。……わたしたちはあなたに対して罪を犯しました」。

ダニエルがこのように祈ったのはなぜでしょうか。自分自身を国民と全く同一視したので、必然的に彼らの運命を自分の運命と見なしたのでしょう。彼はすべての人が罪を犯し、神の栄光を受けられなくなっているという原則を理解していました。すべての人が神の前に有罪であることを理解していました。罪の救い主イエスに関する70週の預言がダニエルの悔い改めの祈りの直後に来ていることを考えると、後者の解釈はずっと意義深いものとなります。

NOTE

「神よ、わたしを憐れんでください/御慈しみをもって。/深い御憐れみをもって/背きの罪をぬぐってください」(詩編 51 : 3、口語訳 51 : 1)。

告白の詩として知られている詩編51編はダビデによって、彼がバト・シェバに対して大きな罪、つまり姦淫と殺人を犯した後で作られました。それは苦悩と自己嫌悪の中で作られたもので、神の導きに心を開いた魂に与えられる聖霊の力の賜物でした。

「それは聖霊による赦しと清めを求める祈りです。この嘆願には、神の憐れみと将来への約束に対する感謝の誓いが伴っています。ダビデの不義の経験を描いたこの詩編ほど、心から悔い改めて神の赦しと回復の力に信頼する罪人の姿を如実に描いた旧約聖書の聖句はほかにありません」(『SDA 聖書注解』3巻 755 ページ)。

問1 詩編51編の中でダビデの悔い改めを示す聖句はどれですか。

悔い改めそれ自体に何の功績もありませんが、神に自分が捧げることのできるすべてを意味します。私たちは悔い改めるとき、自分のうちに神に捧げるものが何ひとつないことを認めます。つまり、私たちはどんな行いによっても自分自身を救うことができないということです。私たちにできるのはただ自分の罪を認め、その赦しを求めるだけです。これが真の悔い改めです。これがなければ、神は私たちのために何もおできになりません。私たちの罪に対する刑罰がまだ支払われていないからではありません。むしろ、悔い改めは私たちが自分の無力さと神の救いの必要性を認めていることのしるしとなるからです。悔い改めとは、罪人に絶対できないことを罪人に代わって神が成し遂げてくださることを認めることです。真の悔い改めは信仰による救いを理解していることのしるしです。

罪は姦淫や貪欲ではなく、自己称揚と高慢でした。姦淫の罪は懲戒を受けますが、自己称揚と高慢の罪では教会の懲戒を受けることはありません。この種の罪の恐ろしさ、怖さがわかるでしょうか。

「こうして、ペトロは^{ろう}牢に入れられていた。教会では彼のために熱心な祈りが神にささげられていた」(使徒12:5)。

聖書によれば、ペトロの奇跡の釈放は教会の熱い祈りの結果でした。このときペトロほど祈りを必要としている人はいませんでした。

第一に、ヘロデはヤコブを「剣で殺した」とペトロを捕らえました。ペトロの明日は決して明るくありませんでした。第二に、ペトロは牢獄に閉じ込められ、「2本の鎖でつながれ、……番兵たちは戸口で牢を見張っていた」(6節)。ペトロには逃げる機会はありませんでした。第三に、ヘロデは過越祭が終わるまでペトロを捕らえておき、その後で「民衆の前に引き出す」つもりでした(4節)。その時は切迫していました(6節)。

問1 悲惨な牢獄の中で、ペトロは何をしていたと聖書は記録しているでしょうか。

ペトロは主の助けを信じていましたが、まさかこのような形で救出されるとは思ってもいませんでした。天使によって牢から出され、通りに立ったとき初めて、彼は「我に返り」、それが幻でないことを知ったのでした(9~11節)。

ペトロ自身、この奇跡に非常に驚いたようです。彼は3年半にわたり、イエスの愛弟子としてイエスに従ってきました。死人が生き返り、目の見えない人が見えるようになり、病人が奇跡的にいやされ、悪霊につかれた人が解放されるのを、彼は見てきました。それらは自分がいま経験した奇跡よりもずっと信じがたいものでした。それにもかかわらず、彼は驚きました。

驚いたのはペトロだけではありません。囚人に逃げられた哀れな番兵たちのことを考えてください。彼らは死刑を宣告されていますが(19節)、これも、神がご自分の民の祈りにお答えになった結果でした。

NOTE

不思議な方法で私たちの祈りは応えられます。聖書は私たちが個人として、また教会としてもっと祈ることを勧め、教えています。

▼ もっと深く学びたい方へ ▲

イエスの祈りは“神よ、世を救いたまえ”(God Save the World) マタイ6:9～13には、イエスの最も有名な祈りが記されています。「だから、こう祈りなさい。『天におられるわたしたちの父よ、御名が^{あが}崇められますように。御国が来ますように。御心が行われますように、天におけるように地の上にも。わたしたちに必要な糧を今日与えてください。わたしたちの負い目を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように。わたしたちを誘惑に遭わせず、悪い者から救ってください』」

祈りは多くの場合、クリスチャンの信仰の中でも神秘に包まれています。私たちは祈るように教えられています。祈るとき、それには結果があることも知っています。事実、祈りは多くのすばらしいことを実現してくれました。しかしどのように祈りが働いているのかを知ることはできません。

「キリストは、わたしたちに与えるために、父なる神から絶えずお受けになった。『あなたがたが聞いている言葉は、わたしの言葉ではなく、わたしをつかわされた父の言葉である』と、主は言われた(ヨハネ14:24)。『人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためである』(マタイ20:28)。イエスは、自分のためではなく、他の人々のために、生き、考え、そして祈られた。イエスは、毎朝神との交わりに幾時間かを過ごしたあとで、人々に天の光を与えるために出ていかれた。イエスは、日ごとに聖霊のバプテスマをお受けになった。神は、新しい一日の早くからイエスの目を覚まし、彼の心とくちびるに恵みをそそがれた。それは、彼が人々に分け与えるためであった」(『豊かな人生の秘訣』91ページ)。

ミニガイド

ジョージ・ミュラー（1805～98）は若いとき放蕩に日を過ごしていましたが、リバイバル集会に出席して改心し、やがてイギリスで牧師となりました。彼は霊的なことだけでなく、現実的な救いに目を向け、特に孤児たちの救済をこころざし、2千人に及ぶ孤児たちの幸せのために生涯を捧げました。この働きは絶えざる祈りが必要とされましたが、事実、ミュラーといえば「孤児たちの父」「祈りの人」といわれるほど信仰生活において祈りを大切にしました。彼は祈りについて次の5つを確信していました。

- (1) 子供たちを救うことは神の意志である。テモテ 2:4に記されているこの確かな証拠がある限り、自分の仕事に疑いを抱くことはできない。
- (2) 私は、人々の救いを自分の名によって祈ったことはない。いつも尊い主イエスの御名といさおしに頼った。
- (3) いつも神は私の祈りを喜んで聴いてくださると確信した。
- (4) 罪を自覚したときはそれを放っておかなかった。詩編66:18にあるように、不義があるなら聞き入れてくださらないのは当然である。
- (5) ある人のために私は52年以上も祈った。今後も聞き届けてくださるまで祈り続けるつもりである。

ただ要求を出す祈りでなく、祈りを神との対話とし、聞き届けられるまで祈りましょう。（アンドリュー・マーレー著『祈りの生活』133ページ、いのちのこことば社）

「神は、私どもが礼拝に専心するからといって、なにもこの世からのがれて隠遁者となり、修道僧になることを望んではおいでになりません。私どもの生涯はキリストの生涯のごとく、山と群集の間になければなりません。祈るばかりで働かない人は、まもなく祈ることをやめるか、その祈りはただ形式的な習慣になってしまいます」（『キリストへの道』139ページ）。



殉教者と殺人者

● 暗唱聖句 ●

「義のために迫害される人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである」
(マタイ5:10、新共同訳)

「義のために迫害されてきた人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである」
(マタイ5:10、口語訳)

安息日午後

今週のテーマ

6月2日

ギリシア語の“殉教”と“あかし”は同じ語源から出ています。神の聖名を汚すより死を選ぶことがキリスト教の殉教者を生みました。彼らは命を捧げる最高の犠牲を払ったのでした。

殉教者について学ぶ理由 ナイヤガラの滝の近くにあるろう人形の拷問博物館は通り過ぎましょう。ドイツ、ローテンブルクにある中世刑罰・拷問資料館は迂回しましょう。フォックスの『殉教者の書』は読まないようにしましょう。人類の悪業を思い起こさせるこれらは見たくも、思い出したくもありません。しかし、悲しいことに、人類の歴史におけるこれらの非人間的な行為は決して夢ではなく、現実だったのです。

聖書の殉教者について学ぶことには意味があります。パウロは書きました。「全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない」(コリ13:3)。私たちは殉教の背後にある愛について学びます。聖書が殉教について記しているのは、それなりの理由があります。今週は、その理由について考えましょう。

「ところが彼らは共謀し、王の命令により、主の神殿の庭でゼカルヤを石で打ち殺した」(歴代下24：21)。

祭司ヨヤダの子ゼカルヤ(ゼカリヤ書の著者ではない)の物語は悲しいほど短いものです。7歳で王位についたヨアシュ王は、祭司ヨヤダによってよい感化を受けていました。しかし、祭司ヨヤダが死ぬと、王はユダの高官たちの悪影響に染まります。「ヨヤダの死後、ユダの高官たちが王のもとに来て、ひれ伏した。そのとき、王は彼らの言うことを聞き入れた。彼らは先祖の神、主の神殿を捨て、アシエラと偶像に仕えた。この罪悪のゆえに、神の怒りがユダとエルサレムに下った」(歴代下24：17、18)。

問1 王と高官たちは忠臣ゼカルヤを殺害しました。その結果、アラム軍がユダとエルサレムを攻撃して、今度は王と高官たちが殺害されました(同23～25)。どんな教訓があるでしょうか。

主はご自分の民が自ら滅びるのを見ごしにされません。「彼らを主に立ち帰らせるため、預言者が次々と遣わされた。しかし、彼らは戒められても耳を貸さなかった(19節)。そこで、ついに「祭司ヨヤダの子」(20節)ゼカルヤが、主から与えられた戒めに立ち帰るようというメッセージをもって遣わされます。ゼカルヤは20節で、民の不従順が繁栄を阻んでいると言っています。「なぜあなたたちは主の戒めを破るのか。あなたたちは栄えない」。

預言者のメッセージの中心にあったのは、神に従い、生き、栄えるようというメッセージでした。それにもかかわらず、神の民は不信仰のゆえに神の声に聞き従いませんでした。神の民が神の導きを拒むなら、その結果はいつでも悲劇的なものとなります。

この物語の中で最も驚かされるのは、神によって導き出された民が預言者を拒み、預言者を殺している点です。私たちは今日、どんな意味で「預言者を石で打ち殺す」危険がありますか。

NOTE

「王は彼を剣で撃ち、その死体を共同墓地へ捨てさせた」(エレ26:23)。

預言者ウリヤ(バト・シェバの夫ではない)のことはあまり記されていませんが、彼の死はエレミヤの働きとの関連において研究する必要があります。エレミヤ書26章によれば、エレミヤはウリヤとは別にユダに悔い改めと服従を説いていました。しかし、彼の言葉は祭司や預言者に受け入れられませんでした。祭司と預言者たちは、「高官たちと民のすべての者に向かって言った。『この人の罪は死に当たります。彼は、あなたがた自身が聞かれたように、この都に敵対する預言をしました』」(エレ26:11)。

問1 無名の預言者ウリヤは誰と同じような預言をして誰の反感を受けたのでしょうか。エレ26:20

エレミヤは熱意をもって次のように説得を試みます。(1)「主がわたしを遣わされた」(エレ26:12)。(2)もしあなたがたが道を改めるなら、「主はこのように告げられた災いを思い直されるかもしれない」(13節)。(3)「わたしはお前たちの手中にある。お前たちの目に正しく、善いと思われることをするがよい」(14節)。(4)「ただ、よく覚えておくがよい、わたしを殺せば、お前たち自身と、この都とその住民の上に、無実の者の血を流した罪を招くということを」(15節)。エレミヤの説得は成功し、彼は死を免れました。

しかし人々はその悪い行いを改めませんでした。一方、「この都とこの国に対して、エレミヤの言葉と全く同じような預言をしていた」(20節)ウリヤは、そのために殺されました。

エレミヤは助かりましたが、ウリヤは助かりませんでした。聖書は何の説明もせず、事実をそのまま記録しているだけです。人生において説明できない出来事がよく起こるのはなぜでしょうか。納得できないような状況下でも神への信頼ができるでしょうか。

「ヘロデは……ヨハネを捕らえて縛り、牢に入れていた。ヨハネが、『あの女と結婚することは律法で許されていない』とヘロデに言ったからである」(マタ14:3、4)。

バプテスマのヨハネは神の預言者で、聖霊によって導かれていました。彼は生まれる前から主によって特別な働きに任じられていました。「彼は主の御前に偉大な人になり、ぶどう酒や強い酒を飲まず、既に母の胎にいるときから聖霊に満たされていて(ルカ1:15)。イエスも言われました。「言うておくが、およそ女から生まれた者のうち、ヨハネより偉大な者はいない(ルカ7:28)。しかしヨハネは横暴な王によって捕らえられ、最後には罪深い女とその娘の怒りと欲望のゆえに処刑されます。名誉ある死には思えません。

「イエスのご自分のしもべを救い出すために手をお出しにならなかった。イエスはヨハネが試練に耐えることをご存じだった。救い主は、よろこんでヨハネのもとに行き、ご自分がそこにおられることによって暗い牢獄を明るくしようと思われたことだろう。だがイエスは、ご自分を敵の手に渡して、その使命を危険にさらすようなことをなさらなかった。イエスはよろこんでご自分の忠実なしもべをお救いになりたかった。だが後年牢獄から死へ移らねばならない幾千の人々のために、ヨハネは、殉教のさかずきを飲むのであった。イエスに従う者たちが……ひとりさびしく獄舎の中で弱りはてたり、剣やごうもんや火あぶりの刑で殺されたりするとき、キリストご自身がその忠実さについてあかしされたバプテスマのヨハネが同じ経験を味わったことを思って、彼らの心は、どんなにかささえられることだろう」(『各時代の希望』上巻281ページ)。

もしあなたがヨハネやキリストの弟子であったなら、ヨハネの投獄と死を見て失望し、疑いを抱いたかもしれません。不幸な出来事に遭うと疑問や疑いを抱きがちなのはなぜですか。

NOTE

「人々は大声で叫びながら耳を手でふさぎ、ステファノ目がけて一斉に襲いかかり、都の外に引きずり出して石を投げ始めた。証人たちは、自分の着ている物をサウロという若者の足もとに置いた」(使徒7:57、58)。

大祭司はステファノが神、モーセ、聖所、律法に反することを語っているとして彼を非難しました。これに対するステファノの応答が石で打たれたこと背景になっています(使徒7:1~53参照)。7人の執事の中でも最も有力な人物であったステファノは敬けんで、信仰のあつい人でした。彼はユダヤ人でしたが、ギリシア語を話し、ギリシア人の習慣や生活にも通じていました。彼はキリストのために熱心に働き、その行いも立派でした。人々は、「彼が知恵と“霊”とによって語るの、歯が立たなかった」(使徒6:10)のです。ステファノが弱く、優柔不断で、無能であったなら、おそらく殺されはしなかったでしょう。

問1 ステファノが最高法院で語った説教は使徒言行録7章のほとんどを占めています。彼が憎しみを受けたのはどの点だと思いますか。

バプテスマのヨハネの死とステファノの死に注目してください。ヨハネは暗く、じめじめした独房の中で衰弱し、ついには酔った勢いでした約束の結果として殺されました。一方、ステファノは、大勢の群衆の前で説教し、キリストを力強くあかし、「聖霊に満たされ」、「神の栄光と神の右に立っておられるイエス」を見ました(使徒7:55、56)。ステファノは、ある意味で、ヨハネの「不名誉な」死とは対照的に、「栄光に包まれて」殉教しました。エレン・ホワイトによれば、ステファノの敬けんな殉教死はタルソスのサウロに大きな衝撃を与えました。彼はやがて使徒パウロとなります。しかし、2人の状況がどれほど異なっていようと、ヨハネもステファノも共にキリストの忠実なしもべであったことには変わりありません。

「はっきり言うておく。あなたは、若いときは、自分で帯を締め、行きたいところへ行っていた。しかし、年をとると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくないところへ連れて行かれる」(ヨハ21:18)。

キリストはこの聖句の中で、ペトロが将来どのような死を遂げるかを予告しておられます。「ペトロがどのような死に方で、神の栄光を現すようになるかを示そうとして、イエスはこう言われたのである。このように話してから、ペトロに、『わたしに従いなさい』と言われた」(19節)。

問1 イエスはペトロの殉教とその形まで予告しました。それでも主は「わたしに従え」と仰せになりました。主に仕えるとはどんな決心を要しますか。

両手を伸ばして これは明らかに十字架刑をさしています(ヨハ21:19参照)。伝承によれば、……ペトロは、主を拒んだ者が主と同じように十字架につけられるのはあまりにも恐れ多いとして、逆さに十字架につけられて死んだと言われています(『患難から栄光へ』下巻240ページ、『SDA 聖書注解』5巻1072ページ参照)。

ペトロは3度、主を拒みます。その後、再び受け入れられ、新約聖書の著者のひとりになります。最後には殉教の死を遂げます。ペトロは、最終的にはキリストによって勝利しますが、霊的な弱点も持っていました。再びキリストに受け入れられてからも失敗を犯しています(ガラ2:11～20参照)。

しかしペトロは最後まで耐え忍びました。それは彼の手紙を読めばわかります。彼はキリストに仕える者たちが味わう試練を理解していました。また、それらの試練が再臨において与えられる報いに比べればいかに取るに足らないものであるかも彼は理解していました。 ペトロ1:6、7を読んでみましょう。

NOTE

キリストに仕えるように召された者は自分の命を捧げることになるかもしれません。各時代の殉教者たちはいつも神が与えてくださる永遠の世界に目を注いでいました。彼らは神による救いと新しい命への希望をもって試練に耐えました。

▼ もっと深く学びたい方へ ▲

今週は、殉教した5人の神の使命者について学びました。しかし、神の民に対する迫害がすべて死をもって終わったわけではありません。聖書はさらに多くの信仰者たちが、死より守られたことが書いてあります。迫害してもキリスト教は生き続けました。ペトロの手紙 2:4～8でペトロは、神が正しい人たちを守り、悪人を罰せられると述べています。

次のように書かれている通りです。「主は、信仰のあつい人を試練から救い出す一方、正しくない者たちを罰し、裁きの日まで閉じ込めておくべきだと考えておられます。特に、汚れた情欲の赴くままに肉に従って歩み、権威を^{あなど}侮る者たちを、そのように扱われるのです」(ペト2:9、10)。

ディスカッション

イギリスの詩人、アルフレッド・ロード・テニスンは、次のように言いました。

「もし不死というものがないのなら、
私は海に身を投げるだろう」

彼は永遠という希望のない人生の空しさについて記しています。私たちは殉教の死を遂げることがないかもしれませんが、永遠への希望は試練を耐え忍ぶうえでどんな力になりますか。

ミニガイド

『日本切支丹宗門史』(岩波文庫、3巻)は明治の初期、フランスからの使節として来日し、日本各地をまわってキリシタンたちの迫害、殉教を詳細に調べたレオン・パジェスの報告書です。寛永6年(1629年)のところを引用します。

「64人が召し捕られ、雲仙に送られた。そこで5組に分けられ、男たちは互いに励ましあうことのないように別々にされて着物を剥ぎ取られた。拷問が続き、一人二人を除いて他は転んだ。

ただ一人朝鮮の婦人イサベラはどうしても屈服しなかった。『夫は折れたぞ』と聞かされると、『私は天に永遠の夫をもっております。ですから救いの事では、この世の夫に従うわけはありません』と答えた。

翌日イサベラは雲仙に連れてゆかれた。彼女は2時間あまり石の上に立たされ、首に大きな石を吊るされ、口の中にも幾つか入れられた。石は頭の上にも乗せられた。『もしこの石が落ちたら棄教したしるしだ』と役人は言った。彼女はできるだけ判然と答えた。『体は転んでも心を変えませぬ。なぜと申して石が頭から落ちないようにするのは私の力でできないことですから』。しかしこの石は落ちず、イサベラの言う通り、首の石の重みも感じなかった。

拷問13日の後、奉行の前に連れ出され、物を言うことも許されず、彼女は帰宅させられた」

【20世紀最後の5人の殉教者】

1950年代のこと、アメリカの若い青年5人が宣教師として南米エクアドルへの伝道を志しました。対象は凶暴なアウカ族でした。周到な準備をし、当地への友好を示すためにたびたび連絡を続け、ついに彼らが名づけた“パームビーチ”という川岸に着いたのですが、数日後、彼ら5人の死体が発見されました。毒の塗った槍や剣が彼らの体に刺さっており、5人とも殺害されていました。

未亡人となった妻たちは夫の意思を継いで同じ人々への伝道を進め、これらインディアンへの愛を込めて奉仕しました。彼女たちの感化によってアウカ族の多くがクリスチャンになりました。殉教者の死が意味を持つのはずっと後になってでした(実業の日本社『ジャングルの5人の殉教者』より)。



信仰の巨人たち

● 暗唱聖句 ●

「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです」
(ヘブライ 11 : 1、新共同訳)

「さて、信仰とは、望んでいる事がらを確認し、まだ見ていない事実を確認することである」
(ヘブル 11 : 1、口語訳)

安息日午後

今週のテーマ

6月9日

完全でもなく、変革、^{けんせき}譴責、それ以上に恵みが必要であった男女がヘブライ11章の中で信仰の英雄として描かれています。彼らに一つ共通しているのは、だれも見えない世界のかなたにある見えない約束を信仰によってしっかり^{つか}掴んでいたということです。

完全な信仰 見えないものを見る フランスの劇作家、サミュエル・ベケットは、反宗教劇『ゴドーを待ちながら』の中で、来ると約束しておきながらいっこうに現れないゴドー氏を何日も待ち続ける2人の路上生活者を描いています。ベケットはこの劇の中でキリスト教の信仰、つまり実現しそうな約束を信じている人々を象徴的に皮肉ったのでした。

ベケットの提起した問題はヘブライ11章に登場する人たちの見方と全く異なります。信仰の巨人たちは目に見える世界のかなたにあるものを見ていました。アベルとアブラハム、サムソンとサムエル、イサクとイスラエル人、ヤコブとヨセフ、ほかのすべての人たちは、信仰によって神の約束を自分のものとししました。これらの約束はまだ見たことのないものでしたが、キリストの血によって保証されたもので、決して世の与えることのできないものでした(ヘブ11:13)。

「信仰によって、アベルはカインより優れたいけにえを神に献げ、その信仰によって、正しい者であると証明されました。神が彼の献げ物を認められたからです。アベルは死にましたが、信仰によってまだ語っています」(ヘブ11:4)。

アベルは信仰を働かせた人の中にあげられているのは興味深いことです。靈感によれば、神はアベルと個人的に親しく交わられました。創世記4:4には「アベルは羊の群れの中から肥えた初子を持って来た。主はアベルとその献げ物に目を留められた」とあります。エレン・ホワイトは、アベルがその献げ物をささげると「天から火が下って、犠牲を焼き尽くした」と記しています(『人類のあけぼの』上巻66ページ)。犠牲をささげるたびに、天から火が下ってそれを焼き尽くすのを見ていたのなら、信仰の必要性を感じるでしょうか。

問1 まだ見ていないものを信じるのが信仰だとしたら、アベルは何を見ていたのだと思いますか。

アベルの信仰は神の实在より、キリストによる救いに向けられていました。アベルのささげる犠牲は彼が十字架を理解し、信じていたことの象徴でした。この贖^{あがな}いの計画によって、神ご自身が私たちの律法違反に対する代価を払い、私たちを有罪宣告から救ってくださるのです。「従って、今や、キリスト・イエスに結ばれている者は、罪に定められることはありません」(ロマ8:1)。

アベルの「優れたいけにえ」は彼がまだ来られない、約束された救い主の功績に全的に信頼していることを示していました。自分自身の善行よりも、イエス・キリストの義の行いに信頼することははるかに信仰を必要とします。いけにえをささげるとこの「信仰の行為」によって、アベルが「正しい者であると証明され」たことも興味深いことです。

アベルのすばらしい信仰はいけにえをささげること自体でしょうか。いけにえが象徴しているお方の義ですか。

NOTE

「信仰によって、エノクは死を経験しないように、天に移されました。神が彼を移されたので、見えなくなったのです。移される前に、神に喜ばれていたことが証明されていたからです（ヘブ11:5）。創世記5:24には「エノクは神と共に歩み、神が取られたのでいなくなった」と記されています。この「歩み」という動詞は比較的珍しい形のヘブライ語動詞で、何かが継続していることを表しています。ヨブ記1:7にも同じ語形が用いられています。「お前は何をしていたのか」と神から尋ねられたサタンが、地上の「ほうぼうを歩きまわっていました」と答えている場面です。このように創世記とヘブライ人への手紙からわかることは、エノクの生涯が主に対する継続的な信仰と服従の生涯であったということです。

問1 ヘブライ 11 : 6 の意味を考えてください。

信仰がなければ神に喜ばれることはできません。信仰がなければ神を知ることができないからです。「神を愛する」ことを至上とする宗教にとって、神を知ることが不可欠です。自分の知らないものを愛することはできません。

哲学者や神学者は、神の存在に関して多くの優れた論証を考え出しました。宇宙論的論証、目的論的論証、存在論的論証などがあります。これらの論証がいかに優れたものであっても、完全ではありません。神は墮落した人間の頭脳を超えておられるので、つねに信仰の余地が残されています。信仰は完全に理解できないことでも信じます。完全に理解できるなら信仰の必要性はありません。頭上に空があることを信じるのに信仰を必要としません。見上げれば、空があるからです。しかし空のかなたに神がおられることを信じるためには信仰が必要です。神を見ることができないからです。

さんは無宗教で、機会あるごとにキリスト教信仰の無意味さを強調します。私たちの信仰には十分な理由があることをどのように理解してもらったらいいのでしょうか。

「信仰によって、アブラハムは、試練を受けたとき、イサクを献げました。つまり、約束を受けていた者が、独り子を献げようとしたのです」(ヘブ11:17)。

旧約聖書の中で福音が最も感動的に、力強く、鮮明に表されたのは、モリヤの山におけるアブラハムとイサクの信じがたい出来事においてでした(創世22章)。アブラハムは「独り子」を犠牲としてささげるように求められました。これほどの信仰を表すことのできる親がいるのでしょうか。

問1 ヘブライ11:17にある「独り子」とヨハネ3:16にある「独り子」の犠牲を比較できるのでしょうか。

ヨハネ3:16の出来事とモリヤ山におけるアブラハムとイサクの出来事との大きな違いは、イサクは命が助かり、イエスは死んだことです。私たちが救われるためにはキリストが死ななければなりません。「そして、モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない」(ヨハ3:14)。イサクと父アブラハムの経験は厳しいものでしたが、十字架におけるイエスと父なる神との経験はそれよりもはるかに厳しいものでした。

問2 イサクをささげる前にアブラハムにはどんな約束が与えられていましたか。ヘブ11:19

アブラハムの望みは私たちの最終的な望みと同じです。それはキリスト再臨における死者の復活であり、永遠の生命の希望です。ヘブライ11章に記された人たちは、まだこの約束を受けてはいませんでした。約束を望みつつ、信仰を抱いて死にました(ヘブ11:13)。この約束がなければ、私たちには何の望みもありません。ただ苦しみと絶望のうちに生涯を送るだけです。

「再臨の約束がなければ、初臨におけるキリストの死は時間の浪費」と言った人がいます。あなたはごどう思いますか。

NOTE

「信仰によって、娼婦ラハブは、様子を探りに来た者たちを穏やかに迎え入れたために、不従順な者たちと一緒に殺されなくて済みました」(ヘブ11:31)。

うそをつき、同胞を「裏切った」異教の娼婦が、サラ、モーセ、アブラハム、アベルといった聖書の偉人たちと共に信仰者の名簿に載せられています。理由は簡単です。神の恵みのゆえです。

ヨシュア記2章には、この謎を解く鍵が与えられています。ラハブは暗い背景を持つ女でしたが、それでも紅海を渡り、敵の王を打ち破ったイスラエル人の力あるあかしに心を打たれました。彼女は生ける神、まことの神だけがこのような奇跡的な救いをもたらすことができになることを認めました。彼女は斥候に次のように言っています。「あなたたちがエジプトを出たとき、あなたたちのために、主が葦あしの海の水を干上がらせたことや、あなたたちがヨルダン川の向こうのアモリ人の二人の王に対してしたこと、すなわち、シホンとオグを滅ぼし尽くしたことを、わたしたちは聞いています」(ヨシュ2:10)。

問1 ヨシュア2:11にラハブの信仰についての鍵があります。

ラハブは、まことの神がおられることを告白しました。その信仰は命がけで斥候を助けるという行為において表されました。ヘブライ人への手紙に記されたほかの人たちと同様、彼女の信仰は行いによって表されました(ヤコ2:18)。ヘブライ人への手紙の著者は、聖霊による靈感のもとで、ラハブの信仰が本物であると考えました。彼女はゲームの途中で勝算のあるほうに鞍替えしたわけではありません。彼女は真心からの信仰を表しました。だからこそ、娼婦の彼女が信仰者のリストに加えられているのです。神の恵みは異教徒の娼婦にまで及びます。

うそについて斥候をかくまったラハブは模範的な信仰者と言えるのでしょうか。場合によってはうそを正当化できるのでしょうか。

「これ以上、何を話そう。もしギデオン(士師6、7章) パラク(士師4、5章) サムソン(士師13～16章) エフタ(士師11章)、ダビデ(サムエル書) サムエル(サム2～25章) また預言者たち(使徒7:52)のことを語るなら、時間が足りないでしょう」(ヘブ11:32)。

これ以上、何を話そう 「この名簿は無限に長くなるでしょうが、信仰と忠誠が信心深い生活の本質であるという原則を証明するにはこれで十分です」(『SDA 聖書注解』7巻477ページ)。

ヘブライ11章の前半で、著者は名前を挙げ、信仰に基づいて成し遂げた業績について述べています。後半では、個々の業績を省いて、名前だけに言及しています。

問1 これらの人々が信仰者のリストに加えられた理由を考えてください。

「著者の目的は、忠実な神の民全員の目録を作成することではなく、.....信仰と忠誠が主の再臨を忍耐強く待つうえで欠かせない要素であることを例示することでした。.....著者は、この書の主題を盛り上げてきたものをさらに延長するだけの余地がないことを認めています。.....彼は、天の聖所には私たちのために仕える偉大な大祭司がおられることを明らかにし、すべてのクリスチャンに対して信仰によってその御前に入るように勧めています(ヘブ4:14、16参照)」(『SDA 聖書注解』7巻477ページ)。

ヘブライ11章に挙げられている人たちにあらためて目を向けてください。これら信仰の巨人たちも弱さを持っていました。このことは、神を愛しながらも自分の弱さと闘っている私たちにどんな希望を与えてくれますか。

私の名前、あなたの名前はこの章に載らないと思いますか。この地上ではなぜある人にだけ^{くんしやう}勲章が与えられるのでしょうか。

NOTE

欠点があったにもかかわらず、これらの信仰の巨人たちは大事な教訓を学んだのでした。時間を超え、この世を超え、心満たすことのない現世を超えて神が約束し、キリストを通して与えられるさらに優れた地、天国を望み見ていたのでした（ヘブ11:16）。

▼もっと深く学びたい方へ▲

ヘブライ11章の前半では名前と理由がありますが、その後は名前だけが書かれています。最後の部分では試練だけが書かれていて、名前が書かれていません。

ヘブライ11:33～39を読んでください。これはだれの経験を述べているのでしょうか。

「信仰によって、この人たちは国々を征服し、正義を行い、約束されたものを手に入れ、獅子の口をふさぎ、燃え盛る火を消し、剣の刃を逃れ、弱かったのに強い者とされ、戦いの勇者となり、敵軍を敗走させました。……他の人たちは……拷問にかけられ……あざけられ、……石で打ち殺され、のこぎりで引かれ、剣で切り殺され、……暮らしに事欠き、苦しめられ、虐待され……ました」（ヘブ11:33～38）。

ディスカッション

- * ダニエル、エズラ、エレミヤをリストに入れてこの章を続けてみたらいかがでしょう。新約聖書の人物も挙げることができるのではないのでしょうか。
- * これらの信仰の人は信じて行動しました。信仰と行いはつながってはいますが、行動の重要性に重点をおいてはならないどんな教訓があるのでしょうか。
- * ヘブライ11:40「更にまさったもの」とは何でしょう。著者が何を言おうとしているのかを話し合ってみましょう。

ミニガイド

信仰とは「信じているものが真実であり、期待しているものが必ず来ると確信すること。希望とは単に憧れをもって待ち望むことではなく、確信をもって待機すること」(ウィリアム・バークレー)

「いわしの頭も信心から」ということわざがありますが、「とにかく信じてみよう。丁が出るか、半が出るかわからないが、丁が出ると思いたい。そうあってほしい」というのが信仰ではありません。エレン・ホワイトは「信仰は基礎をおくに足る十分な証拠の上に立っている」と言っています。そして「真理を知りたいと思う人には信仰の基礎となる十分な証拠を発見できる」とも書いています(『キリストへの道』145ページ)。

神の実在を証明する論証として、この世界の実体には本質がある、宇宙には法則がある、規律がある、物質という実在には第一原因がある、といった論議があります。偶然に物質が生じるなど、科学的ではありません。マクロの宇宙を見れば、天体には統一した動きがあり、ミクロの原子には基本的な構造があることなど、世界にはそれらの計画者、創造者、支配者が存在する……といった論議です。

古代メソポタミアの発掘が進み、近年の考古学は聖書に類似した創造の話、洪水物語などを知らせています。旧約時代のアッシリアの王たち、ユダの王ヒゼキヤ、バビロン最後の王ベルシャツアルなどは考古学資料にも残っています。大英博物館には紀元前2千年ごろの「誘惑の印章」が展示されています。そこには神、女性、7つの枝を持った木、そして女性の背後に蛇という図柄が刻印されています。ただし説明する字はありません。

こうした聖書考古学の立証があるから聖書は信頼するに足る、正しいという証拠にするのでしょうか。いいえ、信仰はこうした論証の理解によるのではなく、神との出会い、聖書のメッセージへの信頼です。愛の神と罪ある私の関係を啓示するのが聖書であり、信仰の本質なのです。頭で理解すれば信仰を持ったというのではなく、人格的なつながりが信仰の中核なのです。

キリスト再臨は必ずあります。サイコロの丁が出るか、半が出るかという五分五分の不確実な期待でなく、聖書の確実な証です。それを裏付ける多くのしるしが世に見られるではありませんか！



聖書の女性たち

● 暗唱聖句 ●

「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。
男と女に創造された」 (創世記1:27、新共同訳)

「神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、
男と女とに創造された」 (創世記1:27、口語訳)

安息日午後 今週のテーマ

6月16日

聖書には数において男性のように女性が出てきませんが、聖書のドラマに女性は大事な役割で登場します。創世記のエバからベツレヘムのマリアまで女性は大きな部分を占めてきました。

さまざまな女性たち 「聖書には邪悪な女や模範的な婦人、老女や若い娘、有名・無名の女性など、200人近くの女性の名が記されています。娘(メトシェラの娘たち、フィリポの娘たち)、妻(ノアの妻、ソロモンの妻たち)、母(ミカの母、エリシャの母)、寡婦(油を増やしてもらった寡婦、一人息子に死なれたナインの寡婦)、その他の無名の女たち(子を落とした乳母、7人の夫を持つ女)とさまざまです」(エディス・ディー『聖書の女性たち』)

「これらの女性たちは私の個人的な友であり、毎日の伴侶です。サラ、リベカ、ラケル、ハンナ、イエスの母マリアなどは、実際に私の書斎にいるかのように思うことがあります。彼女たちの物語ほど感動的な記録はありません。最高の文学である聖書に記されているのは、同じ人間性を持った女性たちです」(同上)

あなたも今週の研究から同じ祝福を受けてください。

「バラクはデボラに言った。『あなたが共に来てくださるなら、行きます。もし来てくださらないなら、わたしは行きません』(士師4:8)。妻、助言者、士師、英雄としてのデボラは、聖書に登場する魅力的な女性のひとりです。その人柄については詳しく記されていませんが、わずかな記録から彼女が国民から広く敬われていたことは確かです。

問1 デボラの成功の秘訣は何だと思えますか。

罪のゆえに外国に圧迫されていたイスラエルは解放を求めて主に嘆願します。デボラは主の言葉を受けて軍司令官バラクに、主がシセラに勝利させてくださるので、1万人の軍勢をもって敵と戦うように告げます(6、7節)。強力な軍勢と主による勝利の約束を与えられていたバラクは、それにもかかわらずデボラと一緒に来てくれなければ自分も行かないと言って、戦うことを拒否します。

主にあって勝利の約束を与えられた軍司令官に、デボラが一緒にでなければ戦わないと言わせたものは何だったのでしょうか。デボラの信仰と献身が広く知られていたからにほかなりません。世俗の武器を備えた軍勢が、デボラなしでは動こうとしなかったのはそのためです。

物語は敵軍の敗北をもって終わっているわけではありません。デボラは戦いの始まる前からバラクに、敵の將軍シセラが「女の手」(4:9)に売り渡されると告げていました。それはヘベルの妻ヤエルがシセラのこめかみに釘を打ち込んだときに実現しました(17~22節)。主は女性を用いることによってイスラエルに勝利を与えようとされました。主が女性を用いてご自分の目的を遂行されることもあるということを男性に教えようとしておられるようにも思えます。

この出来事は、主の働きに向いているかどうかを性別によって判断することに関してどんなことを教えていますか。

NOTE

「この時のためにこそ、あなたは王妃の位にまで達したのではないか」(エス4:14)。

エステル物語は、自分の民を滅びから救うために努力した忠実で勇気ある一女性の記録ですが、事はそれほど単純ではありません。むしろそれはどうにもならない状況の中で厳しい選択を強いられた一女性の記録なのです。

問1 エステルはまったく無我の気持ちで行動したと思いますか。彼女を行動させたモルデカイの迫力に充ちた言葉を読んでください。4:13～15

エステルは初め「王宮の内庭におられる王に、召し出されずに近づく者は、男であれ女であれ死刑に処せられる、と法律の一条に定められております」(4:11)と言って、危険が身に及ぶのを恐れ、王の助けを求めることを渋っていました。しかしモルデカイから、あなたが口を閉ざしているなら、「ユダヤ人の解放と救済は他のところから起こり」、あなたも父の家も滅ぼされるにちがいない(14節)と言われたとき、彼女は行動を決意します。

エステルの本当の気持ちはだれにもわかりませんが、モルデカイの厳しい言葉が彼女を動かしたことは確かです。いずれにしても、「私は王のもとに参ります。このために死ななければならないのでしたら、死ぬ覚悟であります」(4:16)という言葉のうちに、どんな犠牲を払ってでも信仰によって歩む人の姿勢が見られます。真に価値のあるのはこのような信仰です。

聖所でたかれる香は、キリストの義を象徴していますが、私たちの祈りでさえ、このキリストの義で清められなければなりません。私たちの祈りそのものが、不純で墮落した心から出るゆえに汚れているからです。エステル記が教えていることは、動機が全く無我で、絶対的に純粋になるのを待っていたら、いつまでたっても何もできないということです。

「ルツは言った。『あなたを見捨て、あなたに背を向けて帰れなどと、そんなひどいことを強いないでください。／わたしは、あなたの行かれる所に行き／お泊まりになる所に泊まります。／あなたの民はわたしの民／あなたの神はわたしの神。／あなたの亡くなる所でわたしも死に／そこに葬られたいのです。／死んでお別れするのならともかく、そのほかのことであなたを離れるようなことをしたなら、主よ、どうかわたしを幾重にも罰してください』」(1:16、17)。

「ルツ記の短い物語はダビデ王[またキリスト]の家系をたどることをおもな目的としています。場面は悲惨です。士師の時代に国は飢饉ききんに襲われ、ユダの住民エリメレクは、生き延びるためにモアブの地に移住します。しかし彼は若くして死に、妻のナオミと2人の息子が残されます。息子たちはモアブの女、ルツとオルパをめとりますが、息子たちもまた死にます。残された3人の女たちはこの時代に自力で生きてゆかねばなりませんでした」(デニズ・カーモディ『現代から見た聖書の女たち』)。

問1 2人の嫁の1人は姑と別れて神々のもとに帰り、1人は姑とその神、その民から離れませんでした。ここにはどんな教訓があるでしょうか。

姑であるものの模範 いつの時代、またどこの国であっても姑と嫁の関係は必ずしもうまくいくとは限らず、深刻な話や笑いの種になったりします。嫁のルツとオルパが姑のナオミを愛したことにはそれなりの理由がありました。自分たちの夫が死んだ当初、ルツもオルパもナオミのもとに留まると言います。「いいえ、御一緒にあなたの民のもとへ帰ります」(1:10)。ナオミには彼女たちの心を引きつけて放さない何かがありました。

神からすばらしい真理を与えられていても、人間関係のつまずきから離れていく人が少なくありません。このことは救霊における人間関係の大切さについてどんなことを教えていますか。

NOTE

「すると、天使は言った。『マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい』」(ルカ1:30、31)

イエスの母マリアは歴史上のどの女性とも違った存在です。信じられないことですが、彼女の胎の中に世の救い主が宿られたからです。世の歴史において、偶像のように崇められるまでに尊敬されている女性はほかにはいません。天使ガブリエルやいとこのエリサベトが言っているように、彼女はまさに「恵まれた方」、「女の中で祝福された方」でした(ルカ1:28、42)。

天使はマリアに、あなたは神から「恵み」をいただいた、と言っています。ここで用いられている「恵み」(ギリシア語でカリス)は、七十人訳聖書(ヘブライ語聖書のギリシア語訳)の創世記6:8で用いられている言葉と同じです。「しかし、ノアは主の好意(カリス)を得た」。ノアもマリアも、主によって用いられるような品性を備えていたことは明らかですが、「カリス」(恵み)という言葉は、彼らがその役割にふさわしい価値を備えていたことを意味するものなのでしょうか。

男を「知らない」のに聖霊によって身ごもると言われたときのマリアの応答は、信仰によって生きることの本質をよく表しています。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように」(ルカ1:38)。

マリアの立場に立って考えてみてください。天使がやって来て、とても信じられないこと、人間の理性や科学では不可能なことが起こると彼女に告げます。ルカ1:34の彼女の言葉を見れば、当然ながら、約束を受け入れることがいかに困難であったかがわかります。

メッセージを完全に理解したわけではありませんが、彼女には信じるだけの十分な証拠が与えられました。ここにマリアのすばらしさ、主が彼女をお用いになった理由があります。神の約束に対する幼子のような信仰のゆえに、マリアは神を信じるすべての人の模範となることができたのです。

「この町に一人の罪深い女がいた。イエスがファリサイ派の人の家に入って食事の席に着いておられるのを知り、香油の入った石膏の壺を持って来て、後ろからイエスの足もとに近寄り、泣きながらその足を涙でぬらし始め、自分の髪の毛でぬぐい、イエスの足に接吻して香油を塗った」(ルカ7:37、38)。

聖句には名前が出ていませんが、この女はマグダラのマリアです。彼女は復活の朝、最初に墓に来て(マタ28:1、マコ16:1、2)、弟子たちに最初に復活を知らせ(マタ28:7、8、ルカ24:1~10、ヨハ20:18)そしてイエスが復活後に最初にお現れになった人でした(マタ28:1、5、6、9)。ルカ7章に描かれた彼女の姿と何と対照的なことでしょう。

問1 イエスとの関係においてファリサイ人シモンとマリアとの決定的な差は何でしょうか。ルカ7:41、42

詳しいことは書かれていませんが、記録によるとマグダラのマリアは非常に罪深い女でした。このたとえから計算すると、マリアの罪はシモンの罪より10倍大きかったことになります。しかし、聖書の中で叱責されているのはマリアでなくシモンの方です。シモンにはマリアのような真の悔い改めと感謝の心が見られなかったからです。シモンは自分の借金を「返す金」(ルカ7:42)のない哀れな罪人でありながら、自分を義とする精神からキリストの足もとに伏して悔い改めようとしない人たちを代表しています。

「墮落し、心が悪霊の住み家となっていた者が、まじわりと奉仕を通して救い主に近づけられた。イエスの足下にすわって、イエスから学んだのはマリアであった。マリアは十字架のそばに立ち、イエスについて墓に行った。マリアは、イエスの復活ののち一番先に墓にいた」(『各時代の希望』中巻396ページ)。

マグダラのマリアの経験は罪人を赦し、生涯を変える救いの業を示すものです。

NOTE

女王、士師、罪人、母親であろうと、女性は神の民の歴史の中で重要な役を演じてきました。聖書に出てくる男性、女性ともに良い模範、罪の模範を学ぶことができます。

▼ もっと深く学びたい方へ ▲

【神の女性的イメージ】

神はふつつ父という男性名詞で象徴されますが、時には女性のように象徴されることもあります。以下はその例です。

「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛^{ひな}を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった」(マタ 23 : 37)

「わたしはあなたたちを造った。
わたしが担い、背負い、救い出す」(イザ 46 : 4)

「女が自分の乳飲み子を忘れるであろうか。
母親が自分の産んだ子を憐れまないであろうか。
たとえ、女たちが忘れようとも
わたしがあなたを忘れることは決してない」(イザ 49 : 15)

ディスカッション

- * 聖書の中には他に神を女性で象徴されている例がありますか。
- * 神についての啓示において、なぜこうした象徴や表現があるのでしょうか。
- * 神についてだけでなく、教会も女性名詞で表現される場合があります。

ミニガイド

聖書と女性 古代中東においては女性の立場はきわめて低く、旧約のイスラエルも例外ではありませんでした。祭司は男性に限られ、女性には巡礼の要求はなく（出エ 23：17）、ラビの学校も男性のみでした。それでもモーセの民法は女性の立場を高く評価し、女性を保護する教えが全体にみなぎっています。男性は女性の生理期間を尊重すべきことを伝え、心と体を守る責任と戒めが多く認められます。今日でもイスラエルでは女性の地位は男性と等しく、女性首相が現れ、男性と同じく若い女性も兵役につき、政府、経済界で女性の進出はめざましいものがあります。体、顔を黒衣でおおい、公開の場に出ない周辺のイスラム世界の女性とは格段の差があります。

日本もこの面では後進国でした。戦後初めて女性に参政権が与えられ、最近になって男女の平等雇用が法制化されて、女性の自立、平等の主張が認められるようになりました。

聖書に見られる人権の思想はイスラエルを、また西欧の国々を向上させましたが、世界文化への歴史的影響を及ぼしたのは聖書でした。日本にやってきた明治のプロテスタント宣教師は各地に女子教育のための学校を開き、今日、多大の貢献を果たしています。

- ・家計と妻の小遣いに足る十分な費用を渡す。
- ・妻が家の中を切り回していると信じている。
- ・妻と過ごす時間が持てるように予定を立てる。
- ・いつも妻をレディとしていていねいに扱う。
- ・自分が何をしているか、どこに行くかなどの予定を知らせる。
- ・食事に遅れない。急用ができたなら時間前に電話する。
- ・男手の必要な家事を手伝う。
- ・子供と遊ぶ。
- ・妻が家事から解放され、あるいは友人と外出する機会を与える。
- ・二人だけの時間を持てるように工夫する。
- ・彼女の苦情を聞く。
- ・妻の友人のことでねたまない。
- ・妻を怒鳴りつけたり、ののしったり、理不尽な要求をしない。
- ・やたらに他の女性、ことに立派なキリスト者の女性のことを妻に話さない。

（クリスチャンの夫のチェックリスト『クリスチャン生活辞典』より）



小さな罪、大きな結果

● 暗唱聖句 ●

「御覧なさい。どんなに小さな火でも大きい森を燃やしてしまう」
(ヤコブ3:5、新共同訳)

「見よ、ごく小さな火でも、非常に大きな森を燃やすではないか」
(ヤコブ3:5、口語訳)

安息日午後 今週のテーマ

6月23日

罪は 小さくても、中程度でも、また大きなものも 重大な結果を生みます。暗誦聖句にあるヤコブは特に“舌”について述べていますが、彼はすべての罪を避けるように教えています。

「律法全体を守ったとしても、一つの点でおちどがあるなら、すべての点について有罪となるからです」(ヤコブ2:10)

ちっちゃな罪 たった一つの誘惑の木の实、心地よい声のゆえに、エバは園から追い出されました。公正と言えるでしょうか。聞き分けのない民、怒りのままに打った岩のゆえに、モーセは約束の地に入ることを許されず、寂しく山の上で死にました。公正と言えるでしょうか。金の延べ板、銀、美しい着物を隠したためにアカンは石で打ち殺され、焼かれました。公正と言えるでしょうか。このような「ささいな」罪がこれほど重大な結果をもたらすのでしょうか。

「この世はみな舞台であって、人間はただの役者に過ぎない」(シェイクスピア『お気に召すまま』)。すべての人は罪人です。それなのに、ある人は赦され、ある人は罰せられるのはなぜでしょう。同じイエスが姦淫の女に対しては、「行きなさい。もう罪を犯さないように」と言い、エバ、モーセ、アカンに対しては、「ここから出て行きなさい」と言われるのはなぜでしょうか。

「主はソドムとゴモラの上に天から、主のもとから硫黄^{いおう}の火を降らせ……ロトの妻は後ろを振り向いたので、塩の柱になった(創世19:24、26)。

「人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか(マコ8:36)。何の得にもなりません。この原則を最もよく例示している出来事の一つは、創世記に描かれているロトの妻の物語です。彼女はすべてを捨てることを拒んで、自分の家、財産、子供の残されている町を振り返りました。その結果、彼女は自分の求めた物と、持っていた物のすべてを失いました。

問1 「持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる(マタ13:12)という難解な主の言葉とロトの妻とをどう関連づけられますか。

神は人を義の道に導きますが、強制はしません。天使はロトの妻を町から導き出しましたが、彼女の心まで変えようとしませんでした。ロトの妻の体は町を離れていましたが、心は町の中にありました。

「ロトの妻の物語は旧約聖書の22文字に表されています。『ロトの妻は後ろを振り向いたので、塩の柱になった』(創世19:26)……22文字からなるロトの妻についての旧約聖書の伝記は、霊的なものより世的なものを愛する人たち、また犠牲、困難、孤独の生活のために安逸、慰安、地位の生活を捨てるだけの、開拓者の勇氣を持たない人たちのために書かれたと言えないでしょうか。彼女の伝記はまた、罪を取り除くためのあらゆる努力が失敗したときにも、その罪から逃れようとしない人たちに何かを語っています」(エディス・ディーン『聖書の女性たち』)。

神に従うのにすべてを捨てよ、と要求されるわけではありません。私たちの持ち物が悪いと限らないからです。神が求められるのは、私たちが喜んですべてを捨てる心です。この自発性が大切なのはなぜですか(ヨハ14:30)。

NOTE

「アロンの子のナダブとアビフは……香をたいて主の御前にささげたが、それは、主の命じられたものではない、規定に反した炭火であった。すると、主の御前から火が出て二人を焼き、彼らは主の御前で死んだ」(レビ10:1、2)。

ナダブとアビフがどのような立場の人であったか考えてください。「あなたは、アロン、ナダブ、アビフ、およびイスラエルの70人の長老と一緒に主のもとに登りなさい。あなたたちは遠く離れて、ひれ伏さねばならない」(出エ24:1)。彼らは主によって特に重んじられた人たちで、70人の長老と共に山で神の栄光を見るのを許されています。

「ナダブとアビフは神の声を聞き、モーセ、アロンと共に神の山にいました。彼らはイスラエルの神を見、『食べ、また飲んだ』(出エ24:9～11)。彼らは大いなる恩恵にあずかりましたが、その機会から学ばなかったのです」(『SDA聖書注解』第1巻749ページ)。

問1 高い地位、大きな責任を負っていた故に、恐ろしい罪への厳しい刑罰があったのでしょうか。

21世紀に生きる現代人にとって、これらの人たちがなぜそれほど厳しい刑罰を受けねばならなかったのかを理解することは困難です。彼らは火で焼かれました。何が問題だったのでしょうか。

手がかりは聖所の儀式の神聖さと古代イスラエルに与えられた使命の重要性にあります。聖所の儀式は神聖で厳粛な数々の真理を教えていました(事実、救いの計画全体がその中に含まれていました)。そのため神は聖所の儀式に関して細かな規定を与えました。もし酒に酔った祭司ナダブとアビフ(『人類のあけぼの』上巻427ページ)がその罪のゆえに罰せられていなかったなら、イスラエルの民は、神が命令を本当に実行されるお方であることを疑ったかもしれません。神が規定に反した炭火をささげた2人を罰せられるなら、神が本気でその命令を実行されるお方であることが明らかになります。これ以来、民は神が命令を本気で実行されることを理解しました。

「ついに心の中を一切打ち明けた。『わたしは母の胎内にいたときからナジル人として神にささげられているので、頭にかみそりを当てたことがない。もし髪の毛をそられたら、わたしの力は抜けて、わたしは弱くなり、並の人間になってしまう』(士師16:17)。

サムソンは信仰の章といわれるヘブライ11章の中にその名をあげられている16人のうちのひとりです。彼は生まれる前から偉大な人間になるように訓練されていました。彼の母はサムソンの召しへの道を備えるために節制を要求されていました。士師記13:5を読みましょう。

問1 悲劇的な死を遂げたサムソンはどうして士師記の中に書かれているのでしょうか。

イギリスの詩人ジョン・ミルトンは、その有名な劇詩『闘士サムソン』の中で、ペリシテ人によって目をえぐり取られ、奴隷となり、祭りの日に外に座して、自分の運命と人生の有為転変を嘆くサムソンの姿を描いています。「イスラエルをペリシテ人のくびきから解き放つ」という約束を実現することなく、サムソンは「ガザで目をえぐり取られ」、「奴隷」となりました。しかしミルトンの描くサムソンは悲しみの中であって「自分は軽率に神の預言を疑いはしない」と言っています。その一方で、もし「自分の失敗がなかったなら」、預言されたことはすべて実現していたのであるかと問うています。

サムソンは神によって偉大な人物になるように定められていたのに、自らの誤った決断のゆえにそれを実現することができませんでした。神は私たちのために大きな計画を立てておられますが、私たちは不従順のゆえに計画実現を妨げていることがあります。

サムソンの物語は[神の約束が]条件付きであることを教えるように思われます。神は私たちのために驚くべきことをしてくださいますが、それは、神に私たちの「内に働いて、御心のままに望ませ、行わせて」いただくときにのみ可能です(フィリ2:13)。

NOTE

「『ナアマンの重い皮膚病がお前とお前の子孫にいつまでもまといつくことになるのに。』ゲハジは重い皮膚病で雪のようになり、エリシャの前から立ち去った」(列王下5:27)。

シリアの軍司令官ナアマンはイスラエルの神の力によって奇跡的にいやされました。「彼[ナアマン]は随員全員を連れて神の人のところに引き返し、その前に来て立った。『イスラエルのほか、この世界のどこにも神はおられないことが分かりました』」(列王下5:15)。

ナアマンはいやしてもらったお礼に贈り物をしたいと申し出ています。「今この僕からの贈り物をお受け取りください」(列王下5:15)。彼はいやされることを予期して、返礼の贈り物を携えていたこととなります(5節参照)。

問1 エリシャはなぜナアマンからの贈り物を受け取らなかったのでしょうか。受け取ることはよくないことでしょうか。

エリシャは金と銀を受け取ることを固く辞退しました(列王下5:16)。ところが従者ゲハジはエリシャの態度を見ていたにもかかわらず、返礼を受け取るべきだと考えます。彼はナアマンのところにいき、偽って贈り物を受け取り、そのことをエリシャに隠します。

ゲハジの理屈もわからないわけではありません。彼は返礼を受け取るべき理由をあれこれ考えたことでしょう。「報酬は労働の正当な報いではないか」「ナアマンは金持ちだが、われわれは貧しいのだ」「自分たちの苦勞に対して少くらい報酬をもらっても差し支えないではないか」。

「ゲハジの行為は、驚くべき光が心にさし、生ける神の礼拝に対して好感を持ったナアマンの道につまずきの石を置くようなものであった」(『国と指導者』上巻218ページ)。

ゲハジの理屈は正当化できません。キリスト者は廉潔を守り、宗教の純粋性を示すべきです。

「ウザに対して主は怒りを発し、この過失のゆえに神はその場で彼を打たれた。ウザは神の箱の傍らで死んだ」(サム下6:7)。

NOTE

問1 “不敬の罪”はどの点にあったと思いますか。

ウザに下った刑罰ほど不合理に思えるものはありません。いったい、何が起こったのでしょうか。

神の臨在の象徴である主の箱をエルサレムに戻して都に安置するために、ダビデは3万人を集めました。神の箱に対するダビデの熱意は喜びに満ちた祝典となって現されました。神の箱は新しい車に乗せられ、牛に引かれて、行列の先頭を進みました。「ダビデとイスラエルの家は皆、主の御前で……豎琴、琴、太鼓、鈴、シンバルを奏でた」(サム下6:5)。突然、行列が止まりました。神の箱に触れたウザが神に打たれて死んだからです。喜んでいた群衆は一転して恐怖と驚きに満たされたことでしょう。

「ウザと共にいた者たちにとって、ウザの意図は実に高潔と思われたかもしれませんが、彼は手を伸ばして神の箱を押さえ、手助けしようとしただけでした。しかし、彼の心は神に受け入れられるものではありませんでした。神の箱に触れた彼の行為は、無礼にあたるものでした。……ウザの死は多くの者たちに対して、主が正義の神であり、厳格な服従を要求されるお方であることを警告するものとなりました」(『SDA 聖書注解』2巻625、626ページ)。

幸いなことに、聖書に出ているのはウザの物語だけではありません。もしそうなら人々は神の正義に疑いを抱くかもしれません。しかし実際には神は繰り返し、墮落した人類に対する無限の愛、憐れみ、恵み、思いやりを示しておられます。ウザを打たれた神はまた、カルバリーで苦しめられた神でもあるのです。ウザのような出来事が詳しい説明なしに聖書に描かれている場合、疑いを抱くこと自体は誤りではありませんが、それだけで神の愛、正義、公正を疑うことは危険です。こうした出来事の背後には私たちに啓示されていない多くの事実があるのです。ただ信仰をもって進むしかありません。

NOTE

13課全部の研究を終わり、たくさんの人物を勉強してきましたが、パウロの勧めは大事な要約です。「こういうわけで、わたしたちもまた、このようにおびたしい証人の群れに囲まれている以上、すべての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てて、自分に定められている競争を忍耐強く走り抜こうではありませんか、信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら。このイエスは、御自身の前にある喜びを捨て、恥をもいとわないうで十字架の死を耐え忍び、神の玉座の右にお座りになったのです」(ヘブ12:1、2)

▼ もっと深く学びたい方へ ▲

『各時代の大大争闘』下巻 29章(罪惡の起源)を読み、最後の42章(大大争闘の終結)と比較してください。

【あなたの人生の導き手】

今期の研究では、聖なる者と罪人、奴隷と支配者、君主と貧民、異教徒と預言者について、また愛すべき者と忌むべき者、重要な者と取るに足らない者、勇氣ある者と卑劣な者について学びました。これらの人々は多くの教訓を与えてくれますが、最も重要なことは、「自分の運命を決定するのは自分自身である」ということです。自分の最終的な運命は次の選択にかかっています。一つはキリストとキリストの計画に従うことであり、もう一つはサタンとサタンの計画に従うことです。中立の立場はありえません。

ドラマ『惑星地球』の終幕が近づいている今、今期の研究が正しい選択をする助けとなるように祈るものです。

ミニガイド

「小事は分別せよ。大事には驚くべからず」(徳川光圀)

「一善微なりといえども、日を養うて害せざれば、ついにその徳を成す。一悪小なりといえども、日に長じて除かざれば、ついにその身を失う」(伊藤東涯、江戸中期の儒学者)

ロトの妻、ナダブ・アピウ、サムソン、ゲハジ、ウザなど、今週学んだどの人物も失敗例です。すべて命を失いました。きっかけは小さなことのように思われますが、それは聖書記事が少ないだけのことで、実は彼らの生涯の背景や人格の傾向を詳しく知ることができれば私たちも納得しうる運命と思われれます。

イスラエルに王が現れるまでの旧約初期は神権政治で、神ご自身による即決の審判執行が行われたのでした。まことに厳粛な社会でした。安息日に薪を拾ったイスラエル人も(民数15:32~36)、親に反抗する子供も直ちに処罰されました(申命21:18~21)。その数は多く記録されてはいませんが、明らかに神の意図された教育刑であり、他の人々への教訓、注意、警告の意味がありました。「あなたはこうして、あなたの中から悪を取り除かねばならない。全イスラエルはこのことを聞いて、恐れを抱くであろう」(申命21:21)。事実、処罰は同じ内容では繰り返されていません。親への反抗はこの時代に例がなく、執行例もなかったとの注釈もあります。

今日、同じことをしても即決執行はないので、私たちはあまり強く感じませんが、旧約の実例は大事な教訓として受け止めなければなりません。

ナダブ、アピフは祭司アロンの子として聖所の儀式について細部まで教育されていたにもかかわらず、神がともされた燔祭の壇の聖火でなく(レビ16:12、13)、普通の火を利用したことが亡びを招きました。

契約の箱は横棒を通し、祭司のみが運び、触れることができました。ウザは不敬、僭越の過ちを犯したのでした。聖なるものへの軽視、等閑、無関心は私たちが配慮すべき教訓となります。

2001年第3期研究予告

総題 「私たちの信仰の柱」

第1課 私たちの義なる主

日曜日 恵みは神の主導（ロマ3:24、4:16）

月曜日 信仰は人間の応答（ロマ5:1）

火曜日 信仰により恵みによって救われる（エフェ2:8、9）

水曜日 神の豊かな恵み（エフェ1:7）

木曜日 信仰による服従（ロマ1:1～5、ヤコ2:14～26）

（著者）ジョエル・マスボスピ

（東アフリカ支部牧師会長）

私たちの信仰の柱の土台はキリストです。イエス・キリストがすべての中心であり、すべての源でなければ、クリスチャンとして生きる意味はありません。来期はキリストに基づいて築き上げる信仰の柱を学びたいと思います。

私の伝道活動報告

2001年2期

大人

青年(30歳まで)

項目	週													
	1 4/7	2 4/14	3 4/21	4 4/28	5 5/5	6 5/12	7 5/19	8 5/26	9 6/2	10 6/9	11 6/16	12 6/23	13 6/30	合計
1. 文書配布数 (トラクト・チラシ・雑誌・本)														
2. 授けた聖書研究数 (安息日学校クラスも含む)														
3. 講演会、講習会、訪問伝道、 チラシ・トラクト配布、奉仕 活動などに参加した数														

統計上ぜひ必要ですので、期末に信徒伝道会役員に必ずご提出ください。



やさしい聖書入門シリーズ
1 GRACE (グレイス)
2 JOY (ジョイ)
3 PEACE (ピース)

B 5 判 108 ページ
価 格 500 円 (税込み)

「もっと気軽に聖書研究がしたい」。そんな声に応えるテキストができました。

SDA教会の教理、信仰生活の基本が学べます。クリスチャンになったばかりの人、聖書研究、個人での学びなどいろいろな場面で用いてください。

おかげさまで、
大好評！

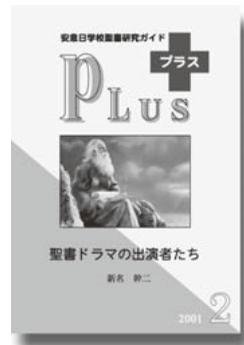
以下続刊 4 巻 LOVE (ラブ)

安息日学校聖書研究ガイド
PLUS (プラス)

A 5 判 価格 370 円 (税込み)

聖書研究ガイドの助けの名称が
PLUS (プラス) になりました。
聖書研究ガイドでは物足りないという方。
プラスがあります。

教師をやることになった。 プラスがあります。
違った見方をしてみたい。 プラスがあります。
あなたの聖書研究に PLUS (プラス) になります。



クリスチャン生活のためのノート ぶどうのえだ

A 5判 80ページ(1期分)
価格 210円(税込み)

聖書研究ガイドのお供に。聖書研究のノートに。日記に。祈りのノートに。礼拝ノートに。

1つで何役もできるノートです。あなたなりの使い方を見つけてください。



小学校下級用
聖書物語
「イエスさまだいすき」

初等科教課が
変わります

B 5判 80ページ

今期から新しくなりました。日本のオリジナル。ワークブックもあります。聖書を創世記から順番に学ぶ楽しい教材です。



小学校上級用
「イエスさまといつしょ」

B 5判 80ページ予定

来期から新しくなります。世界総会発行教課の翻訳物。聖書の順番に関係なく、テーマごとに聖書を学びます。

両方ともに教師用ガイド、暗唱聖句カードがあります。

お申し込みは、各教会の書籍係までお願いします。

2001年度 日没表

	札 幌	仙 台	東 京	名 古 屋	大 阪	広 島	福 岡	鹿 児 島	沖 縄
4 / 6	6 : 06	6 : 04	6 : 06	6 : 17	6 : 22	6 : 34	6 : 42	6 : 40	6 : 49
	13	6 : 13	6 : 10	6 : 12	6 : 23	6 : 28	6 : 40	6 : 47	6 : 52
	20	6 : 22	6 : 16	6 : 17	6 : 28	6 : 33	6 : 45	6 : 52	6 : 55
	27	6 : 30	6 : 23	6 : 23	6 : 34	6 : 39	6 : 51	6 : 58	6 : 58
5 / 4	6 : 38	6 : 30	6 : 28	6 : 39	6 : 44	6 : 56	7 : 03	6 : 59	7 : 02
	11	6 : 46	6 : 36	6 : 35	6 : 45	6 : 50	7 : 02	7 : 08	7 : 06
	18	6 : 53	6 : 42	6 : 41	6 : 51	6 : 56	7 : 07	7 : 14	7 : 10
	25	7 : 00	6 : 48	6 : 46	6 : 56	7 : 01	7 : 12	7 : 18	7 : 13
6 / 1	7 : 06	6 : 54	6 : 51	7 : 01	7 : 06	7 : 17	7 : 23	7 : 17	7 : 17
	8	7 : 11	6 : 58	6 : 55	7 : 05	7 : 09	7 : 21	7 : 27	7 : 20
	15	7 : 15	7 : 01	6 : 58	7 : 08	7 : 12	7 : 24	7 : 30	7 : 24
	22	7 : 17	7 : 03	7 : 00	7 : 10	7 : 14	7 : 25	7 : 31	7 : 25
	29	7 : 18	7 : 04	7 : 01	7 : 11	7 : 15	7 : 27	7 : 33	7 : 26

安息日学校聖書研究ガイド **聖書ドラマの出演者たち**

定 価 460 円 (本体 439 円 + 税)

発 行 日 2001 年 3 月 23 日

原 作 版 発 行 セブンスデー・アドベンチスト
世界総会安息日学校・信徒伝道部

日本語版発行 教団安息日学校・信徒伝道部
〒190-0011 立川市高松町3-21-8

無断転載を禁じます

南アジア支部



モルジブ諸島

インド洋

計画
南アジア支部内に500の教会堂を建設する

教団	教会	集会所	教会員	人口
中央インド	391	814	166,736	260,478,900
北東インド	141	202	30,058	40,073,700
北インド	168	688	40,702	551,013,100
南インド	487	643	111,534	150,562,300
直轄伝道地	7	13	1,106	25,107,000
合計 (00.3.31)	1,194	2,360	350,136	1,027,235,000